和歌山市埋蔵文化財発掘調査年報

－平成19年度（2007年度）－

2010

財団法人　和歌山市都市整備公社

序　文

本書は、財団法人和歌山市都市整備公社が平成19年度（2007年度）に行った和歌山市内の遺跡発掘調査の概要をまとめたものです。

調査の結果、川辺遺跡において縄文時代晩期の土器を使った墓（土器棺墓）、古墳時代の地面を掘りくぼめた家の跡（竪穴住居）、飛鳥時代の竪穴住居や柱を建て並べた建物（掘立柱建物）、奈良時代の灌漑用の水路とみられる溝などを確認しました。太田・黒田遺跡の調査では、弥生時代前期から近代に至る多くの遺構を確認しました。特に、弥生時代中期の竪穴住居６棟や土坑墓などはムラや墓域の広がりを示す貴重な資料です。また、和歌山県内では初めての高床建物が描かれた弥生土器が出土しました。府中Ⅳ遺跡では、弥生時代から古墳時代初め頃の竪穴住居７棟の他、古墳時代の掘立柱建物２棟などを確認しました。

史跡和歌山城においては、『和歌山御城内惣御絵図』に描かれている吹上橋に関する西堀北側の石垣を検出し、御勘定門東側櫓台では、同絵図に描かれた「角御櫓」とみられる礎石建物を確認しました。

以上、調査による新たな調査成果は、郷土の歴史を語る上でなくてはならない重要な視点を与えることになりました。本書が私たちの郷土に関する歴史知識を豊かにすることを願ってやみません。

発掘調査にあたって御協力をいただいた地元の皆様及び本書編集にあたり種々の御教示を賜りました方々に厚く御礼申し上げます。

平成22年（2010年）３月15日

財団法人 和歌山市都市整備公社

理事長　武　内　　功

例　言

1．本書は、平成19年度（2007年度）に財団法人和歌山市都市整備公社が実施した和歌山市内における埋蔵文化財発掘調査事業の概要を掲載する。

2．本書に掲載の調査については、既に報告書が刊行されたものもある。未完のものについては報告書が刊行された際に、その報告をもって正式報告とする。

3．本書の執筆については、執筆分担の文責を文末に記載し、編集は奥村 薫が行った。

4．埋蔵文化財発掘調査及び本年報作成を行った担当者は以下の通りである。

埋蔵文化財発掘調査

【平成19年度（2007年度）】

財団法人和歌山市都市整備公社

事務局　埋蔵文化財班

班　長（学芸員）　北野隆亮

主　任（学芸員）　井馬好英

主　任（学芸員）　奥村　薫

主　任（学芸員）　藤藪勝則

年報作成

【平成21年度（2009年度）】

財団法人和歌山市都市整備公社

事務局　埋蔵文化財班

班　長（学芸員）　北野隆亮

主　査（学芸員）　井馬好英

主　任（学芸員）　奥村　薫

主　任（学芸員）　藤藪勝則

本 文 目 次

Ⅰ．はじめに

平成19年度（2007年度）の調査……1

Ⅱ．埋蔵文化財の発掘調査概要

1．川辺遺跡第6次調査……2

2．太田・黒田遺跡第59次調査……6

3．川辺遺跡第7次調査……10

4．川辺遺跡第8次調査……12

5．西田井遺跡第2次調査……18

6．雑賀崎台場跡発掘調査……20

7．茶臼山古墳第3次調査……22

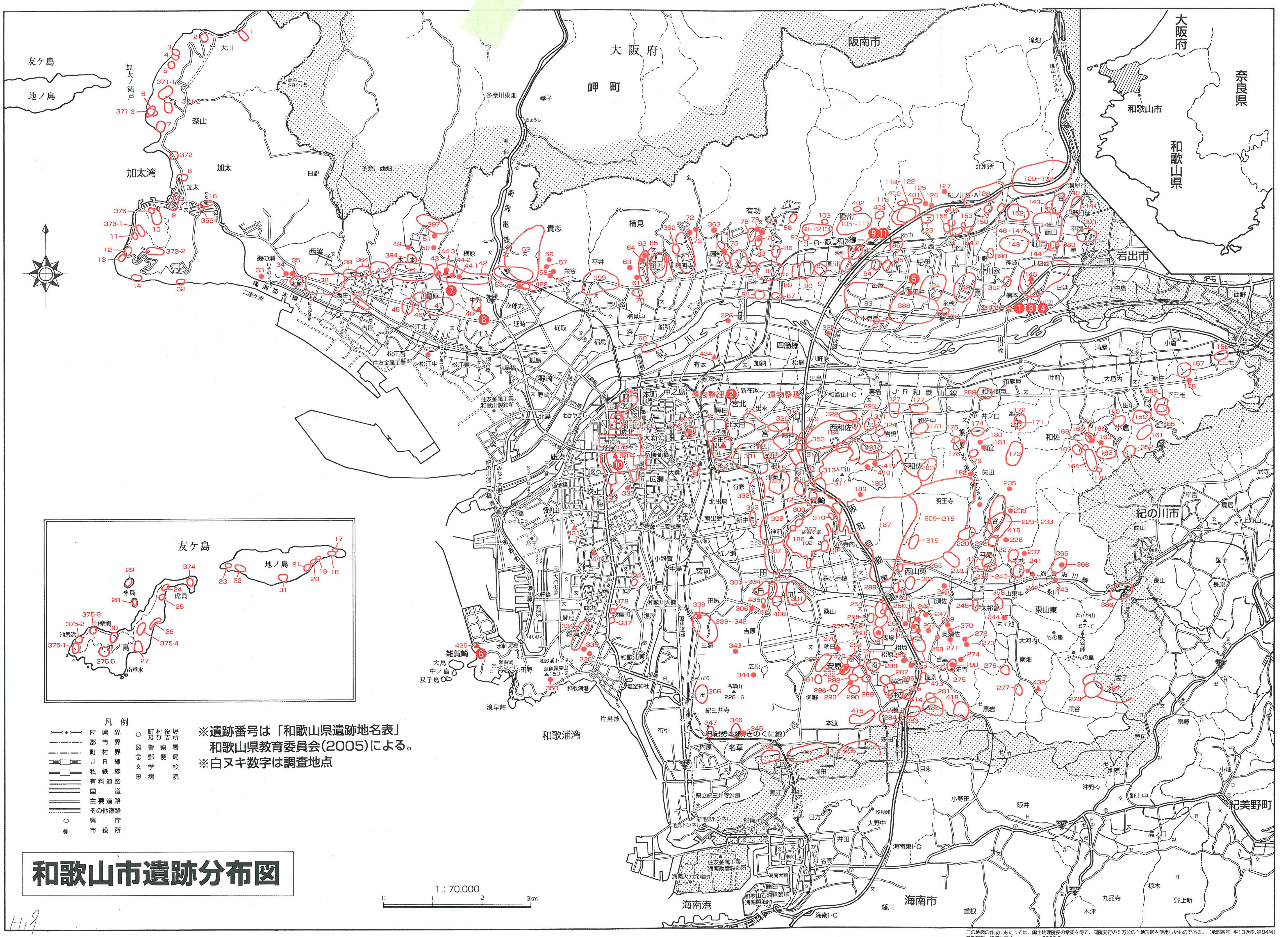
8．中野遺跡第3次調査……24

9．府中Ⅳ遺跡第3次調査……26

10．史跡和歌山城第30次調査……30

11．府中Ⅳ遺跡第4次調査……34

Ⅲ．普及啓発活動……45



和歌山市遺跡分布図

H19

和歌山市遺跡地名表（「和歌山県遺跡地名表」和歌山県教育委員会＜2005年＞より作成。）H.9

遺跡番号	名称	遺跡番号	名称	遺跡番号	名称	遺跡番号	名称	遺跡番号	名称	遺跡番号	名称	遺跡番号	名称	遺跡番号	名称
1	報恩講寺遺跡	47	榎原遺跡	98～102・104	北山古墳群	170	奥池遺跡	255	吉礼Ⅲ遺跡	306	坂田地蔵山古墳	358	山東中遺跡	394	城山遺跡
2	大川西方遺跡	48	中野遺跡	103	北山Ⅱ遺跡	171	高積山遺跡	256	千石山遺跡	307	神前遺跡	359	加太Ⅱ遺跡	395	岡村遺跡
3	藻江遺跡	49	城山古墳	105～117	直川八幡山古墳群	172	薬徳寺跡	257～259	井戸古墳群	308	井辺遺跡	360	雨が谷遺跡	396	室山古墳群
4	しょうぶ谷遺跡	50	権現山1号墳	118	八王寺山古墳群	173	城ヶ峯城跡	260	馬場古墳群	309	岡崎縄文遺跡	361	冬野遺跡	397	木ノ本Ⅳ遺跡
5	水谷遺跡	51	権現山2号墳	119	橘谷Ⅰ遺跡	174	禰宜Ⅰ遺跡	261	馬場遺跡	310	森小手穂埴輪窯跡	362	鳴滝遺跡	398	府中Ⅳ遺跡
6	男良の谷遺跡	52	高芝遺跡	120	橘谷Ⅱ遺跡	175	禰宜Ⅱ遺跡	262～265	東池古墳群	311	大日山Ⅰ遺跡	363	園部円山古墳	399	平井遺跡
7	深山遺跡	53	高芝古墳群	121	橘谷Ⅲ遺跡	176	禰宜貝塚	266	吉里銅鐸出土地	312	井辺Ⅰ遺跡	364	西庄Ⅱ遺跡	400	深谷池北遺跡
8	大谷川遺跡	54	栄谷貝塚	122	橘谷銅鐸出土地	177	河南中学校北方遺跡	267	小山古墳	313	井辺Ⅱ遺跡	365	永山遺跡	401	名草池北遺跡
9	加太遺跡	55	貴志古墳	123	弘西遺跡	178	和佐中遺跡	268	奥須佐窯跡	314	鳴神Ⅱ遺跡	366	永山古墳	402	湯谷池西遺跡
10	加太南遺跡	56	川原崎遺跡	124	北田井遺跡	179	和佐寺跡	269	円満寺古墳	315	鳴神Ⅲ遺跡	367	井辺Ⅲ遺跡	403	平野池南遺跡
11	平の谷遺跡	57～59	川原崎古墳群	125～127	別所古墳群	180・181	禰宜古墳群	270	峯古墳	316	鳴神Ⅳ遺跡	368	紀三井寺遺跡	404	北野池北遺跡
12	田倉崎Ⅰ遺跡	60	国有本遺跡	128	上野古墳群	182	和坂古墳	271	西光寺窯地	317	鳴神貝塚	369	奥山田遺跡	405	山吹丁遺跡
13	田倉崎Ⅱ遺跡	61	大谷古墳	129～139	山口古墳群	183	和佐古墳群	272	吉里1号窯跡	318	鳴神Ⅴ遺跡	370	朝日石槍出土地	406	友田町遺跡
14	船出遺跡	62・64・65	晒山古墳群	140	山口廃寺跡	184	花山古墳群	273	吉里2号窯跡	319	音浦遺跡	371	深山要塞跡	407	津湊Ⅱ遺跡
16	加太駅北方遺跡	63	慶円寺裏山古墳	141	中筋日延遺跡	185	岩橋千塚古墳群	274	頭陀寺古墳	320	鳴神Ⅵ遺跡	371－1	深山第1砲台跡	408	和田Ⅱ遺跡
17	藻崎北浜遺跡	66	雨が谷古墳群	142	山口遺跡	186	井辺前山古墳群	275	頭陀寺遺跡	321	岩橋遺跡	371－2	深山第2砲台跡	409	岩橋Ⅲ遺跡
18	藻崎南浜遺跡	70	楠見遺跡	143	谷遺跡	187	寺内古墳群	276	大将軍窯跡	322	栗栖Ⅰ遺跡	371－3	男良砲台跡	410	前山B226号墳
19	藻崎西浜遺跡	71	鳴滝古墳群	144	里遺跡	188	森小手穂遺跡	277	有ノ木窯跡	323	栗栖Ⅱ遺跡	372	加太砲台跡	411	前山B227号墳
20	神前東浜遺跡	72	奥出古墳	145	川辺遺跡	189	寺内ナイフ形石器出土地	278	宝光寺跡	324	高橋神社遺跡	373－1・2	田倉崎砲台跡	412	城ノ前1号墳
21	神前西浜遺跡	73	有功経塚	146	藤田古墳	190	頭陀寺ナイフ形石器出土地	279・280	松原古墳群	325	紀の川銅鐸出土地	374	虎島砲台跡	413	境原遺跡
22	屋敷浜遺跡	74	園部Ⅰ遺跡	147	硲古墳	209～215	山東古墳群	281	滝ヶ峯古墳群	326	有本銅鐸出土地	375	友ヶ島要塞跡	414	薬勝寺Ⅱ遺跡
23	おそ越の鼻遺跡	75	園部古墳	148	藤田遺跡	218	若林古墳群	282	滝ヶ峯遺跡	327	太田・黒田遺跡	375－1	友ヶ島第1砲台跡	415	本渡遺跡
24	一谷色遺跡	76	園部Ⅱ遺跡	149	宇田森遺跡	219	吉礼砂羅谷窯跡	283	薬勝寺南山古墳群	328	吉田窯跡	375－2	友ヶ島第2砲台跡	416	明王寺遺跡
25	柏の浜遺跡	77	有功遺跡	150	上野廃寺跡(紀伊薬師寺跡)	220～222	平尾古墳群	284	仁井辺遺跡	329	鷲ノ森遺跡	375－3	友ヶ島第3砲台跡	417	平尾遺跡
26	深蛇池遺跡	78	池田遺跡	151	上野遺跡	226	楠古墳群	285	薬勝寺跡	330	鷲ノ森窯跡	375－4	友ヶ島第4砲台跡	418	滝ヶ峯Ⅱ遺跡
27	垂水遺跡	79	有功古墳	152	上黒谷遺跡	227	足守神社古墳群	286	薬勝寺遺跡	331	秋月遺跡	375－5	友ヶ島第5砲台跡	420	太田城水攻め堤跡
28	神島遺跡	80	大同寺墳墓	153	北野窯跡	228	赤山古墳	287	松原Ⅰ遺跡	332	津湊遺跡	376	行者堂東遺跡	421	木広町遺跡
29	沖の島北方海底遺跡	81	大同寺古墳	154	北野遺跡	229～233	塩谷古墳群	288	松原Ⅱ遺跡	333	岡の里遺跡	377	松江経塚	422	朝日蔵骨器出土地
30	野奈浦遺跡	82	大同寺遺跡	154－2	北野Ⅱ遺跡	234	新出古墳	289	薬師谷遺跡	334	関戸遺跡	378	猟口石岩陰遺跡	423	上黒谷Ⅱ遺跡
31	ハイブの浦遺跡	83	法然寺遺跡	155	若宮池遺跡	235	明王寺経塚	290	江南遺跡	335	関戸古墳	379	和歌山城跡	424	東田中遺跡
32	浜遺跡	84	六十谷遺跡	156	上三毛遺跡	236	矢田古墳	291	曽垣田遺跡	336	天神山古墳	380	山口御殿跡	425	雑賀崎台場跡
33～35	磯の浦古墳群	85	和田遺跡	157	下三毛遺跡	237	北池古墳	292	曽垣田Ⅱ遺跡	337	秋葉山貝塚	381	岩橋Ⅱ遺跡	426	小豆島西遺跡
37	磯脇遺跡	86	西辻遺跡	158	小山古墳	238～240	殿山古墳群	293	曽垣田古墳	338	アンドの鼻古墳	382	本願寺跡	427	岩橋高柳遺跡
38	西庄遺跡	87	川口遺跡	159	寺山古墳群	241	土井山古墳	294	城の前Ⅱ遺跡	339～342	三田古墳群	383	神前Ⅱ遺跡	428	和坂南垣内古墳群
39	平の下遺跡	88	六十谷古墳群	160	東国山古墳群	242	丸山古墳	295	城の前Ⅰ遺跡	343	吉原古墳	384	高松焼窯跡	429	栄谷遺跡
40	木ノ本Ⅰ遺跡	89	直川遺跡	161	宮山古墳群	243	高岡古墳	296	大池遺跡	344	広原古墳	385	奥山田古墳群	430	西庄Ⅲ遺跡
41	木ノ本Ⅱ遺跡	90	直川廃寺跡(明光寺跡)	162	小倉古墳群	244	桜山古墳	297	赤津古墳群	345	内原古墳	386	大池遺跡	431	砂山南土師器出土地
42	木ノ本Ⅲ遺跡	91	高井遺跡	163	小倉9号墳	245	伊太祈曽神社古墳群	298	吉礼貝塚	346	内原遺跡	387	大旗山城跡	432	旧聖社境内和鏡出土地
43	木ノ本経塚	92	鳥井遺跡	164	明楽古墳群	246	チショ古墳	299	西吉礼遺跡	347	名草貝塚	388	西田井遺跡	433	今福尖頭器出土地
44－1	釜山古墳	93	田屋遺跡	165	小倉神社1号墳	247～249	城ヶ森古墳群	300	東吉礼遺跡	350	高津子山古墳	389	井ノ口遺跡	434	有本土器出土地
44－2	車駕之古址古墳	94	府中Ⅱ遺跡	166	小倉神社2号墳	250	城ヶ森遺跡	301	和田遺跡	352	金谷廃寺跡	390	神波遺跡	435	坂田遺跡
44－3	茶臼山古墳	95	府中Ⅲ遺跡	167	モント古墳群	251	相坂古墳	302	和田岩坪遺跡	353	興徳寺跡	391	永穂遺跡	指1	史跡和歌山城
45	木本小学校Ⅰ遺跡	96	府中遺跡	168	小倉神社境内遺跡	252・253	千石山古墳群	303・304	和田古墳群	356	太田城跡	392	楠本遺跡		
46	木本小学校Ⅱ遺跡	97	北山Ⅰ遺跡	169	金谷遺跡	254	菖蒲谷遺跡	305	竈山神社古墳	357	山崎山古墳群	393	吉田遺跡		

Ⅰ．はじめに

平成19年度（2007年度）の調査

和歌山市における平成19年度（2007年度）の財団法人和歌山市都市整備公社の発掘調査受託事業は11件である。

調査に至った原因としては、店舗建設などの民間受託が４件に対して遺跡範囲確認調査などの公共的な調査が７件を数え、前年度に比べると民間・公共とも受託が増加し、特に公共関係の調査は確認調査が主体を占めたといえる。

公共関係の調査では、史跡和歌山城吹上口などの史跡整備関連調査が行われた。

これらの調査で、いくつかの重要な成果が得られているので以下にまとめることとする。

縄文時代　川辺遺跡第６次調査で晩期の土器棺墓を確認した。

弥生時代　太田・黒田遺跡第59次調査で中期の竪穴住居６棟や土坑墓などを検出し、ムラや墓域の広がりを示す貴重な資料を得た。また、和歌山県内では初めての高床建物が描かれた弥生絵画土器が出土した。

古墳時代　茶臼山古墳第３次調査において、濠内部の土と西側の外堤の一部を確認し、古墳の形を復元する手がかりを得た。府中Ⅳ遺跡第３・４次調査においては、弥生時代から古墳時代初め頃の竪穴住居７棟の他、古墳時代の掘立柱建物２棟などを確認した。

飛鳥時代　川辺遺跡第６次調査において、竪穴住居や掘立柱建物などを確認した。

奈良時代　川辺遺跡第６次調査において、灌漑用の水路とみられる溝などを確認した。

平安時代　川辺遺跡第６次調査において溝などを検出したほか、太田・黒田遺跡第59次調査では井戸を確認した。

江戸時代　史跡和歌山城第30次調査において、『和歌山御城内惣御絵図』に描かれている吹上橋と堀内部に張り出した橋の取り付け部分に合致する西堀北側の石垣を検出し、御勘定門東側櫓台の調査では、同絵図に描かれた「角御櫓」とみられる礎石建物を確認し、櫓台周辺では浅野氏の家紋（違鷹羽紋）瓦や鯱瓦などが出土した。また、雑賀崎台場跡の調査については、幕末に紀州藩が異国船の来航を警戒して紀伊水道を望む岬の先端に造った台場跡とされる場所の調査を初めて行った。

【2007年度調査一覧表】

番号	調査名	原　因	調査期間	面積(㎡)	調査概要	担当者名
1	川辺遺跡第6次調査	店舗建設	2007.3～5	1153	縄文時代晩期の土器棺墓２基の他、飛鳥時代の竪穴住居や掘立柱建物、奈良時代の灌漑用水路などを検出。	井馬・藤藪
2	太田・黒田遺跡第59次調査	マンション建設	2007.4～8	994	弥生時代中期の竪穴住居６棟、土坑墓などを検出した他、高床建物が描かれた弥生土器などが出土。	北野
3	川辺遺跡第7次調査	機械設備建設	2007.8	41.3	古墳時代前期の土坑、中期の竪穴住居などを検出。	藤藪
4	川辺遺跡第8次調査	機械設備建設	2007.8～9	107	古墳時代の竪穴住居２棟、飛鳥時代の掘立柱建物の一部、平安時代の溝などを検出。	藤藪
5	西田井遺跡第2次調査	住宅建設	2007.10	45	平安時代後期頃の遺物包含層を確認。	北野
6	雑賀崎台場跡発掘調査	遺跡確認	2007.10～11	70.3	石垣を巡らした台場上の広場に結晶片岩の板石をV字形に積み上げた石積みを確認。	藤藪
7	茶臼山古墳第3次調査	集合住宅建設	2007.10	21	濠内部の堆積土と西側の濠外側外堤の一部を確認し、古墳の形を復元する手がかりを得た。	井馬
8	中野遺跡第3次調査	宅地造成	2007.11	20	中世以前の遺構面及び遺物包含層を検出することはできなかった。	北野
9	府中Ⅳ遺跡第3次調査	開発計画	2007.12～2008.1	249	弥生時代後期の竪穴住居１棟、溝１条、古墳時代前期の竪穴住居４棟などを検出。	藤藪
10	史跡和歌山城第30次調査	史跡整備	2007.12～2008.3	232.9	吹上橋と堀内部に張り出した橋の取り付け部分である西堀北側の石垣、御勘定門東側櫓台では「角御櫓」とみられる礎石建物を検出。また櫓台周辺では、浅野氏の家紋である「違鷹羽紋」滴水瓦や鯱瓦などが出土。	北野・井馬
11	府中Ⅳ遺跡第4次調査	開発計画	2008.2～3	282.1	弥生時代から古墳時代初期の竪穴住居７棟、古墳時代の掘立柱建物２棟を検出。	藤藪

Ⅱ．埋蔵文化財の発掘調査概要

１．川辺遺跡 第６次調査

調 査 地　和歌山市川辺208番地　他

調査面積　1141.7㎡

位置と環境

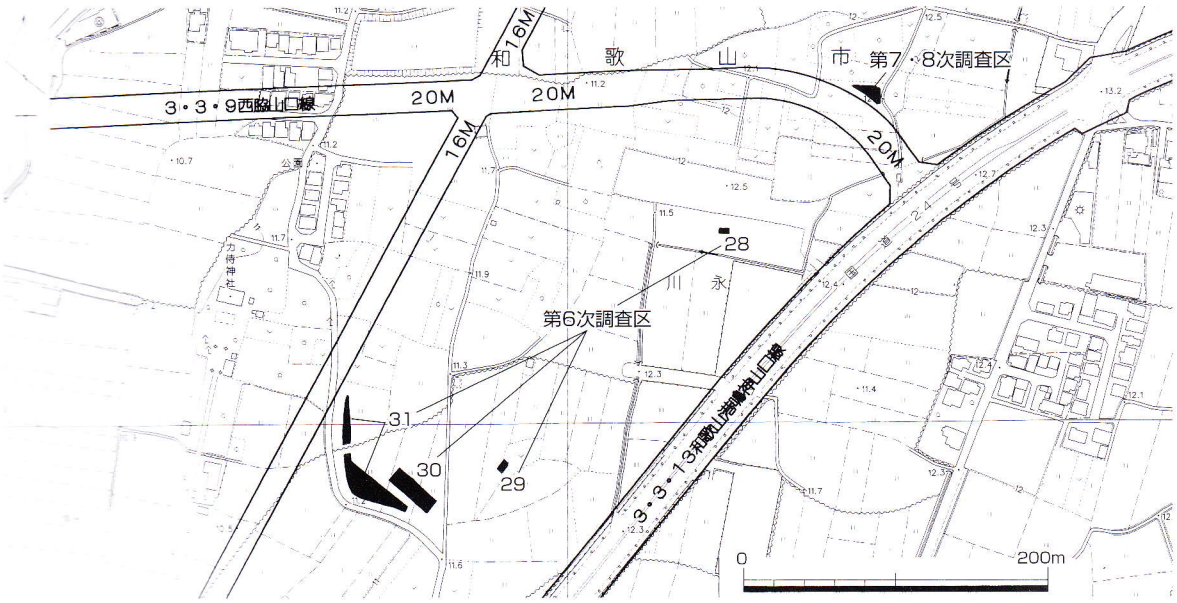
川辺遺跡は、紀ノ川の河口から約12km上流の北岸に位置し、和泉山脈の南麓、紀ノ川との間に形成された標高11～12mを測る平野部の微高地に立地し、遺跡の北西部は和泉山脈から南に張り出した扇状地上に形成されている。そして遺跡中央部は、この扇状地を形成する砂礫層と沖積作用によって堆積したシルト質土の境界部分となり周囲よりやや低い微低地となっている。

当遺跡では、これまで縄文時代晩期の土器棺墓や弥生時代中期の竪穴住居、方形周溝墓、弥生時代後期から古墳時代初頭にかけての竪穴住居、古墳時代後期末から飛鳥時代にかけての竪穴住居や掘立柱建物、中世の掘立柱建物や土坑墓など多数の遺構を検出し、遮光器土偶などを含む多量の遺物が出土している。

調査内容

第６次調査は、川辺遺跡の中央部における大規模開発（開発計画範囲約70,000㎡）の一部である防火水槽及び調整池、合併処理槽設置部分について行った本発掘調査である。本調査区は同開発計画のなか昨年度調査を行った第４・５次調査区との調査地区名称及び確認された遺構名称の混乱を避けるため、調査区名及び遺構番号を継続して付すこととした。よって、調査区は北から第28～31区とし、第31区については用水路によって分断された北側を第31区北とした。

第28区の現況は、荒蕪地であり現代の耕作土（第１層）上部には盛土が厚く堆積している。現地表面の標高は11.80～12.00mを測り、また第１層上面では11.35m前後を測る。



調査位置図（数字番号は調査地区番号を示す。）

第１層以下の基本層序については、江戸時代の耕作土と考えられる第２層、また室町時代の耕作土と考えられる第３層が堆積している。第４層は、褐色粒を含む鎌倉時代の堆積土であり２単位に細分できる。その下層には、平安時代の耕作土と考えられる第５層が堆積し、これらの各堆積層は水平に堆積していることから、調査地周辺が長期にわたり耕作地として利用されてきた可能性が考えられる。さらに第６層は３単位に細分ができるもので、それぞれ南西に向かって厚く堆積する。遺構面は第６a層上面（第１遺構面）及び第６c層上面（第２遺構面）の合計２面を確認し、その標高は前者が10.65m前後、後者が10.25～10.40mを測り南西に向かって低く傾斜する。

写真１　第28区第１遺構面全景（東から）

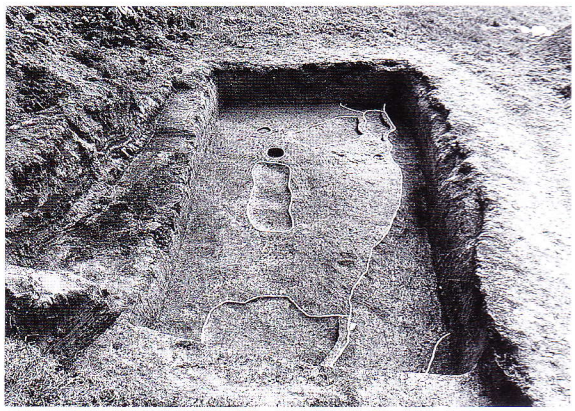


写真２　第29区第１遺構面全景（北東から）

第１遺構面では、土坑２基、ピット５基を検出した。これらのうち土坑１基とピット１基については平安時代の遺構とみられるものの、他の遺構は出土遺物が細片のため時期判別は困難であった。また第２遺構面では、溝３条を検出した。これらの溝は、第６c層上面において検出したことから、層位的に判断して縄文時代の遺構と考えられる。

第29区の現況は水田であり、現地表面の標高は10.70～10.80mを測る。現耕作土（第１層）以下の基本層序については、部分的に土質及び土色などが異なるものの、褐色粒を多く含むことを特徴とする第４層及び、黄褐色のシルト層である第６層を基準として、堆積の前後関係は第28区の様相と共通する。遺構面は、第６a層上面（第１遺構面）及び第６c層上面（第２遺構面）の合計２面を確認し、その標高は前者が9.90～9.98m、後者が9.57～9.67mを測り、ともに北東から南西に向かって低く傾斜する。

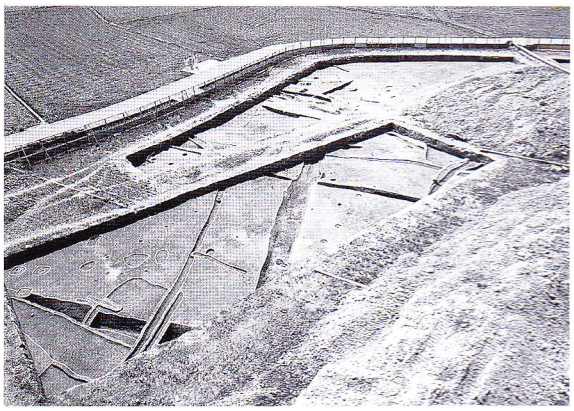


写真３　第30・31区溝61周辺（東から）

第１遺構面では、溝１条、土坑５基、ピット３基を検出した。これらのうち土坑２基及び溝１条については、出土遺物から平安時代のものと考えられる。第２遺構面では、土坑３基、ピット９基を検出した。遺構の時期は層位的に判断して縄文時代のものと考えられるが、縄文土器の出土は土坑１基の１点のみである。

第30・31区の現況も水田である。現地表面の標高は第30区で10.70m前後、第31区で10.65m前後、また第31区北では10.75m前後である。このことから調査区周辺の現地表面は、北から南に向かって緩やかに下降する傾斜をもつ。また基本層序については、部分的に土質・土色などが異なるものの、特徴的である第４層及び第６層を基準として、堆積の前後関係は第28・29区の様相と共通する。

遺構面は、前者と同様に２面あり、第１遺構面が古墳時代前期から鎌倉時代にかけての遺構を検出した第６a層上面である。ただし、第31区中央部では第５層の堆積する範囲において、鎌倉時代の遺構がその上面から掘削されており、基本的には３面の遺構面が存在することとなる。第２遺構面は、縄文時代晩期中葉の遺構を検出した第６c層上面である。また第31区北では第４層上面から掘削された江戸時代の粘土採掘坑を検出した。遺構検出面の標高は、第６a層上面で9.75～10.40m、第６c層上面で9.20～10.20mを測る。この遺構検出面の高低差は、第５層の堆積の有無からみた微地形の高低差に対応し、総じて各遺構面は第31区の微低地に向かって50㎝程度の高低差で低く落ち込む状況となる。

第１遺構面では、古墳時代前期の溝や土坑、中期以降の溝や土坑、飛鳥時代の竪穴住居や掘立柱建物及び溝、奈良時代の溝や土坑及びピット、平安時代の溝、鎌倉時代の柵や溝及び土坑など多数の遺構を検出した（写真３）。そのうち古墳時代では、前期の溝２条及び土坑１基、中期以降では溝１条及び土坑１基、後期のものとして溝２条、土坑２基やピットなどがある。特筆すべきものとしては第31区北で検出した須恵器甕を埋設したピット391がある（写真４）。飛鳥時代では、竪穴住居１棟（竪穴住居11）や掘立柱建物２棟、溝６条や土坑３基がある。竪穴住居11は長辺3.5～4.0m、短辺3.8mを測るやや歪な長方形の住居である（写真５）。この住居の構造は、四壁に壁溝をめぐらし、四隅に主柱穴をもつ４本柱建物で、北辺中央部には造り付けのカマドが構築され、その支脚に土師器高杯を逆位にして用いている（写真６）。また住居の北東隅部、カマドの右側に貯蔵穴とみられる土坑がある。次に、奈良時代では、前期の溝１条や中期の溝１条（溝61）、土坑４基、大規模な落ち込み２基などがある。なかでも溝61は、第30・31区の中央部を東西方向に貫き、第31区中央部においてほぼ直角に屈折し南流する大溝である（写真３）。この大溝の規模は、東西長約35m、南北長約

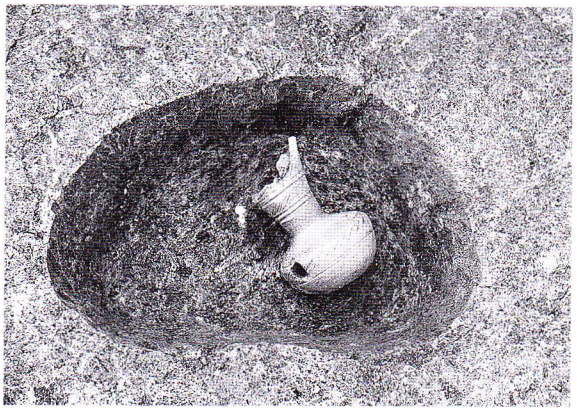


写真４　第31区北ピット391（東から）

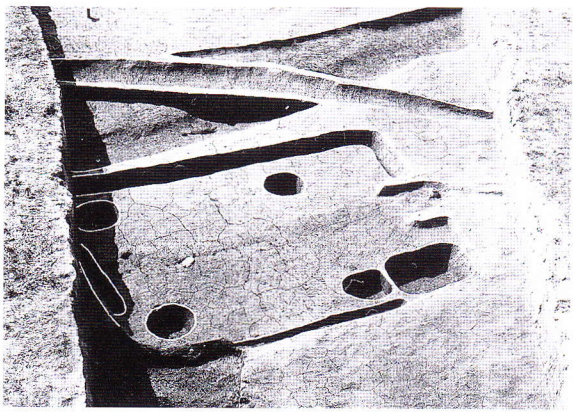


写真５　第31区竪穴住居11（南東から）

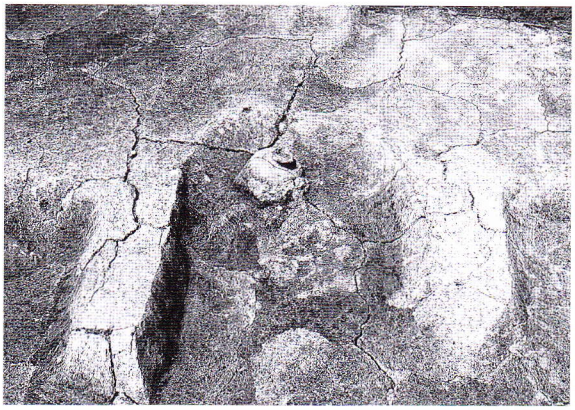


写真６　竪穴住居11カマド（南から）

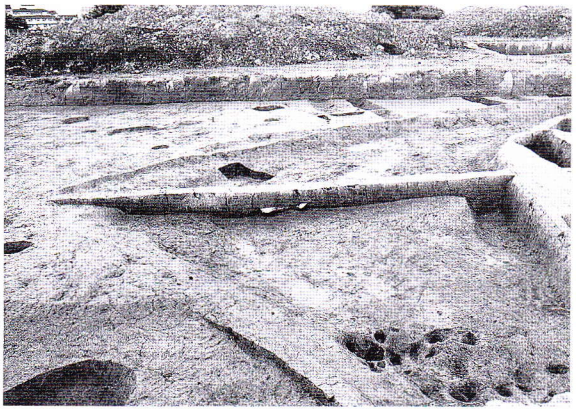


写真７　第31区溝61屈折部（南西から）

16m、幅1.35～2.0m、屈折部の最大幅5.9mを測る（写真７）。深さは東西溝で46㎝、屈折部では36㎝、南北溝で42㎝を測る。この大溝の屈折部は、飛鳥時代の溝群が集中する微低地部に位置し、この大溝が微高地である調査区の東側から微低地に向かって排水することを目的としたものと考えられる。さらに平安時代では溝３条、鎌倉時代では柵の他、溝１条や土坑２基があり、第31区北を中心としてピット多数を検出した。

写真８　第30区第２遺構面全景（上が北東）

第２遺構面では、縄文時代晩期中葉の土器棺墓２基（土坑152・168）をはじめ、溝状遺構２条や土坑及びピット多数の他、弥生時代の溝１条を検出した。土坑152は、第30区の北西隅部において検出した長径1.10m、短径89㎝、深さ34㎝を測る不正楕円形の土器棺墓で、深鉢を棺として用いている（写真９）。また土坑168は第30区の南西部において検出した長径1.10m、短径85㎝、深さ49㎝を測る不正楕円形の土器棺墓で、底部を取り除いた浅鉢を棺として用いている（写真10）。

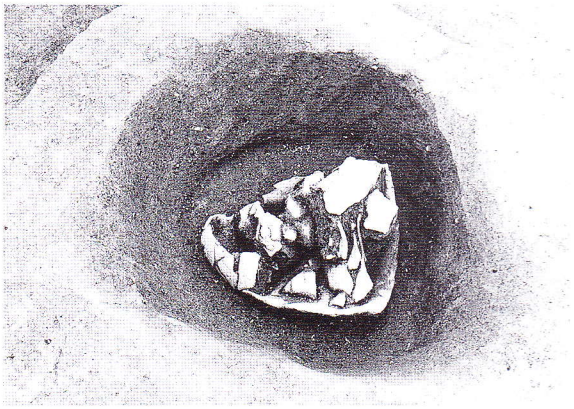


写真９　第30区土坑152（西から）

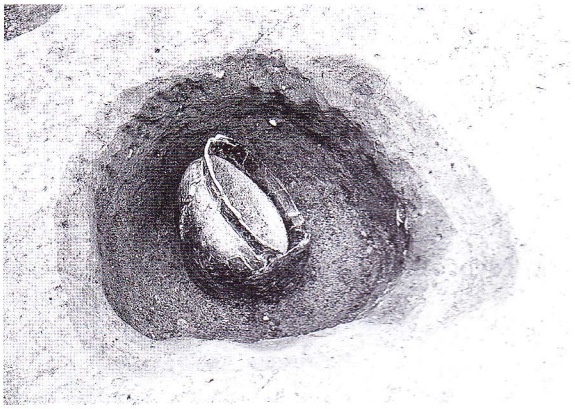


写真10　第30区土坑168（南東から）

まとめ

今回の調査では対象地北東部に位置する第28区及び南東部に位置する第29区では、２面の遺構面を確認し、それぞれ遺構を検出しているものの面積が狭小なため時期的には平安時代の遺構を確認したに過ぎない。

対象地南西部に位置する第30・31区では第１遺構面において古墳時代から鎌倉時代の遺構を多数検出し、なかでも主体となる飛鳥時代から奈良時代にかけての竪穴住居や掘立柱建物、溝など良好な遺構を検出した。これらの遺構分布傾向としては、古墳時代の遺構が主に微低地部の東西に分布するのに対し、飛鳥時代から奈良時代の遺構群は溝61を除き、微低地部に溝群が集中して掘削され、その東西に広がる微高地部に竪穴住居や掘立柱建物などが分布する。第２遺構面においても微高地部にあたる第30区の範囲内において縄文晩期の土器棺墓２基の他、廃棄土坑など多数の遺構を検出した。

以上のことから本調査において遺跡西部の様相の一端を明らかにしたものといえよう。

（井馬好英・藤藪勝則）

【参考文献】『川辺遺跡第４・５・６次発掘調査報告書』　和歌山市都市整備公社　2008年

2. 太田・黒田遺跡 第59次調査

調 査 地 和歌山市太田字城跡446，448，449，450，451，453，454番地内

調査面積 994㎡

位置と環境

太田·黒田遺跡（遺跡番号327）は、紀ノ川下流南岸の和歌山平野のほぼ中央部に位置し、平野部でも微高地にあたる地点に所在する。遺跡は南北約850m、東西約500mの範囲をもつ弥生時代から江戸時代にかけての大規模な複合遺跡である。

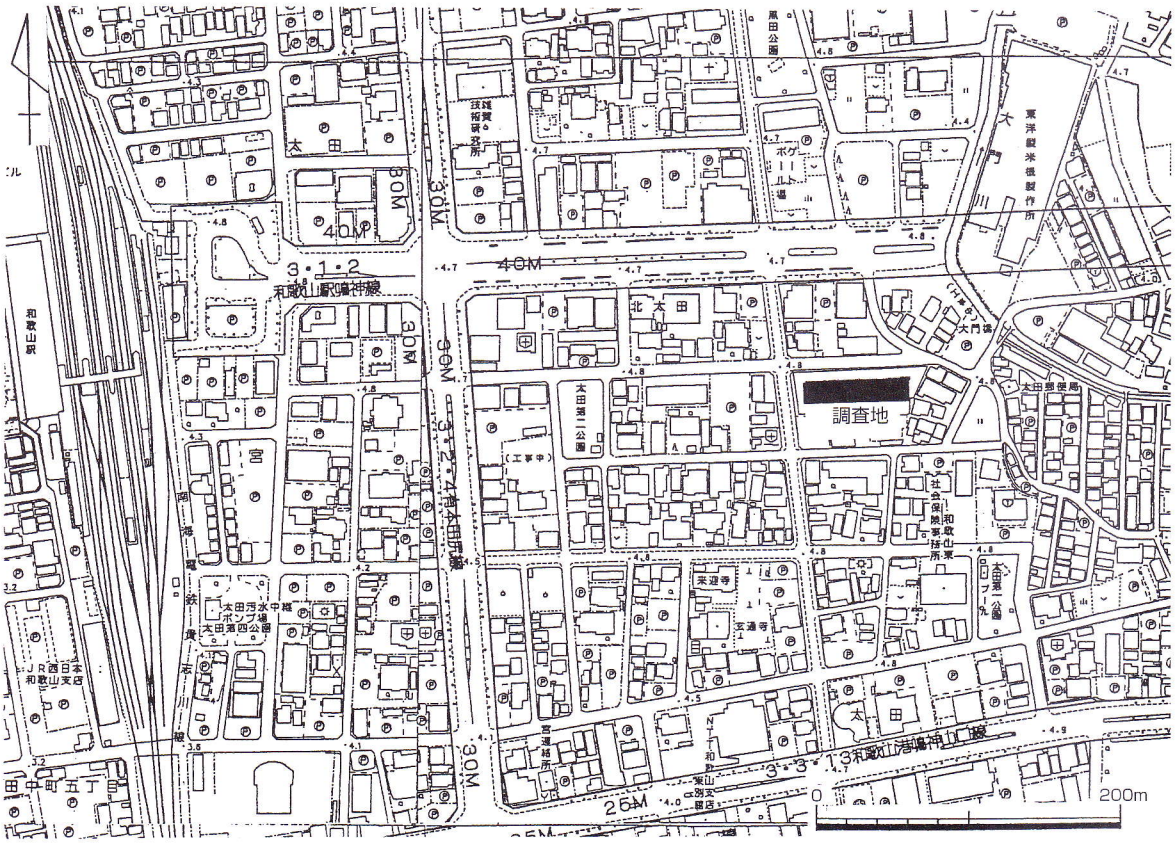
今回の調査は、遺跡範囲東端部においてマンション建設工事が行われることになり、遺跡範囲内であることから、和歌山市教育委員会が工事に先立ち確認調査を行った結果、遺構の存在が確認され本発掘調査を行うことになった。調査は、和歌山市教育委員会の指導のもと財団法人和歌山市都市整備公社が委託を受けて実施したものである。

現地調査は、平成19年４月16日から平成19年８月１日までの期間で行った。

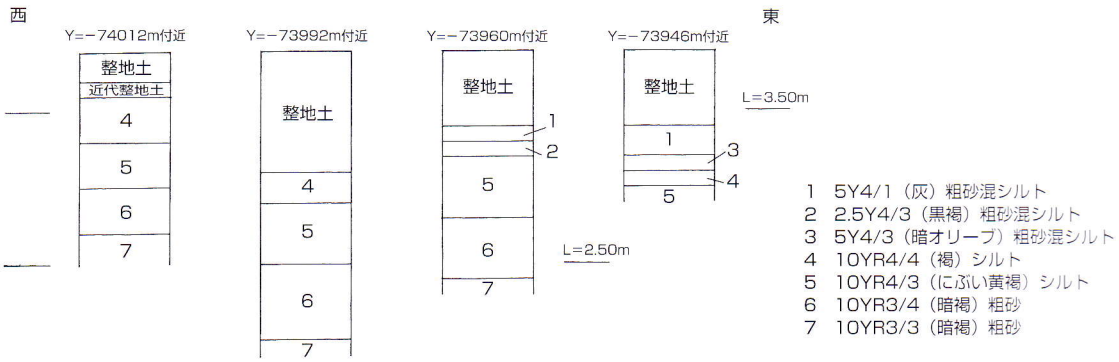
調査内容

調査地は、遺跡範囲東端部に位置し、調査前の状況は建物等を撤去した更地であった。調査は、マンション建設工事予定範囲に南北14m、東西71m、面積994㎡の調査区を設定して実施した。

調査対象地は既存建物の撤去時に深く撹乱を受けていたが、調査区西端部から約15mまでの範囲



調査位置図



調査地北壁土層柱状模式図

は比較的削平が浅く、弥生時代中期から江戸時代までの遺構面が残存していたため第１遺構面として調査を行い、その下層の調査区全面において第２遺構面（弥生時代前期～中期）を確認し、調査を行った。なお、第１遺構面の残存していない場所についても、本来は第１遺構面所属とみられる深く掘削された遺構を第２遺構面において検出した。

調査地の地表面標高は約3.9ｍを測る。地表下深さ約50㎝までは既存建物解体時のものとみられる整地土が堆積しており、その下の旧表土と考えられる第１層は厚さ10～20㎝の水田耕土である。なお、この水田面の標高は3.4ｍを測る。第２層は厚さ５～10㎝の黒褐色粗砂混シルトであり、床土に相当する層である。第３層は厚さ５～10㎝の暗オリーブ色の粗砂混シルトの土層である。第１層から第３層は調査区東側の一部で確認したものであり、第２層と第３層は江戸時代までの遺物を僅かに包含する層である。第４層は厚さ20～40㎝の褐色のシルトで、弥生時代中期までの遺物を僅かに包含する層である。この層の上面は第１遺構面で弥生時代中期以降の遺構を多数検出した。第５層は厚さ30～40㎝の黄褐色のシルトである。この層の上面が第２遺構面で、弥生時代中期以前の遺構を検出した。第５層上面の標高は調査区西端のＹ＝－74012ｍ付近が最も高く、標高3.30ｍを測

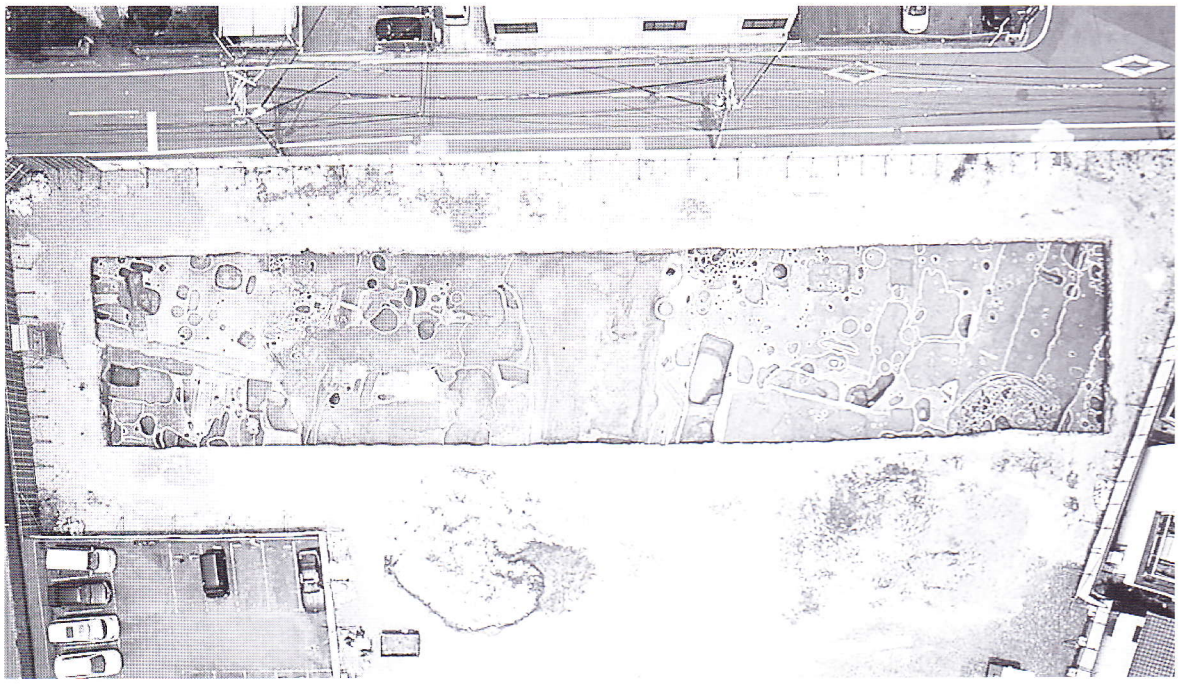


写真１　調査区全景（上が北）

る。そこから東に下降した傾斜をもって堆積しており、Y＝－73992m付近が最も低く標高2.90mとなる。その地点から東へは緩やかに上昇してゆき、Y＝－73960m付近で標高3.20mを測るが、そこから東へ再び緩やかに下降してゆき、東端のY＝－73946m付近では標高3.00mとなる。第5層以下は無遺物層であることから、自然地形がそのような起伏をもっていたものと考えられる。第6層と第7層は暗褐色の粗砂の堆積で、第6層は厚さ30～50㎝、第7層は厚さ20㎝以上を測る。

調査区西端部から約15mまでの第4層上面の残存した範囲を第1遺構面として調査を行い、調査区全面において確認される第5層上面で第2遺構面の調査を行った。第1遺構面においては弥生時代中期以降の遺構を多数検出し、第2遺構面では弥生時代中期以前の遺構を検出した。ところが、第2遺構面においても第1遺構面から切り込む遺構を多数検出し、本来の弥生時代中期以前の遺構を検出可能な場所は第4層の残存していた範囲に限られた。しかし、第4層の残存した調査区西端部から約15mまでの範囲は非常に多くの遺構が密集しており、第1遺構面で確認できなかった遺構を第2面で検出するなど、各時期の遺構をこの面においても検出した。

以下、主要な遺構について述べる。弥生時代の遺構は、前期の土坑1基や中期の竪穴建物6棟（竪穴建物1～6）・土坑3基（土坑31・125など）があり、弥生土器や石器が大量に出土した。また、古墳時代前期の土坑3基などがあり、製塩土器などが出土している。古代では、飛鳥・奈良時代の遺構として、溝1条・土坑5基などがある。平安時代前期では、土坑2基（土坑169など）があり、これらは井戸と考えられる。須恵器・土師器・黒色土器などが出土した。中世では、平安時代後期～鎌倉時代の遺構として、溝2条・土坑3基（土坑96など）がある。この土坑3基はいずれも井戸と考えられ、瓦器椀などが出土した。南北朝期から室町時代までの遺構は、溝3条（溝2など）・石組井戸2基（石組井戸3など）

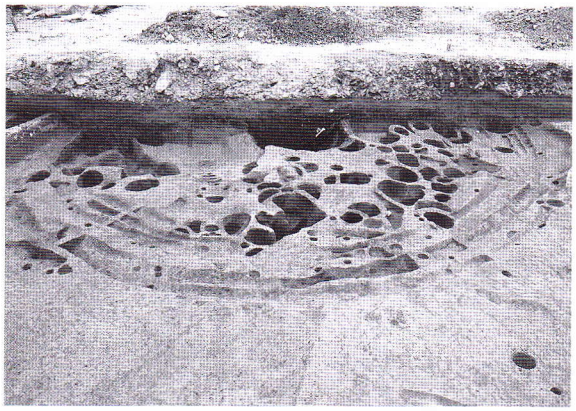


写真2　竪穴建物3（北から）

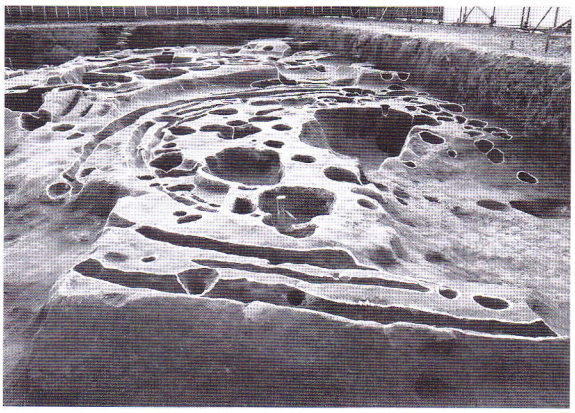


写真3　竪穴建物5（東から）

写真4　土坑31（北東から）

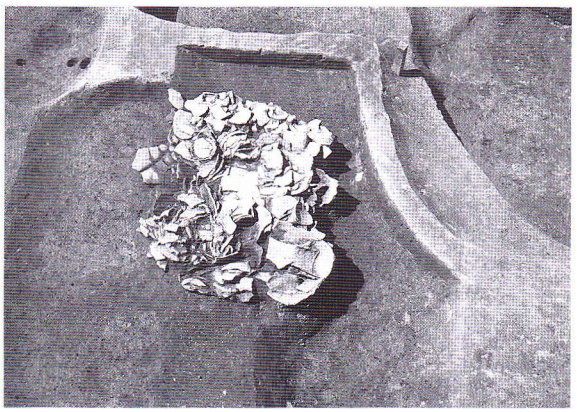


写真5　土坑125（南から）

がある。溝２から鉛製鉄砲玉、石組井戸３からは砂岩製石仏が出土した。また、江戸時代前期の遺構として、溝１と溝２が中世から継続して営まれており、それに溝１条（溝５b）・土坑４基などがある。肥前系などの陶磁器類が多く出土した。江戸時代後期の遺構は、溝５bを埋め立てて流路を東側に付け替えた溝１条（溝５a）・埋桶１基・粘土採掘土坑２基・土坑３基などがある。

出土遺物は、弥生土器、土師器、須恵器、製塩土器、黒色土器、瓦器、土師質・瓦質土器、中世陶器、輸入陶磁器、近世陶磁器、瓦、土製品、石器、石製品、石造物、金属製品、木製品などコンテナ135箱分が出土した。遺物は、弥生時代から近世までの時期の各時代を通じた多種類のものがみられるが、特に注目されるものに高床建物を描いた弥生土器壺体部破片１点がある。

写真６　土坑169（西から）

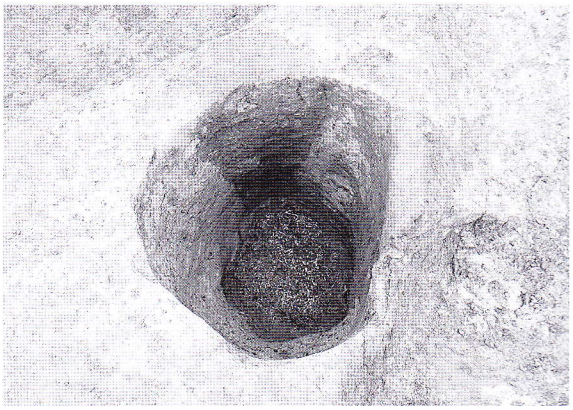


写真７　土坑96（東から）

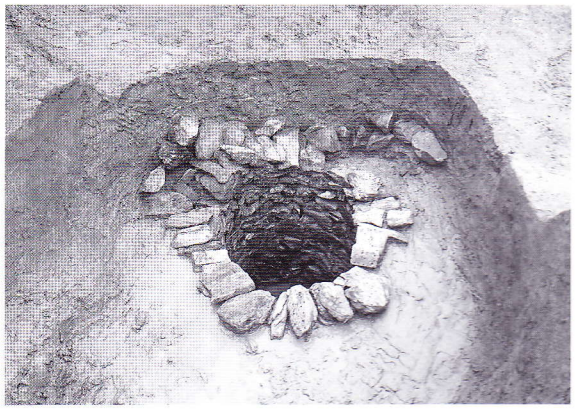


写真８　石組井戸３（南から）

写真９　高床建物を描いた弥生土器壺

まとめ

本調査区において弥生時代から江戸時代にかけての遺構を多数検出した。弥生時代について、前期の状況は不明ながら、調査区全体は中期の集落内部であったものと考えられる。古墳時代から奈良時代にかけては、遺構が散在的にみられる状況であり、詳細は不明である。平安時代から江戸時代前期にかけては、居住域になっていたと考えられ、特に平安時代後期以降は現在の地割と方向性が一致する溝で区画された屋敷地が展開していたものとみられる。江戸時代後期になると、杭と土嚢（のう）で護岸され、堰を備えた灌漑水路が掘削され、調査区北西隅部分を除いて耕地化されたものと考えられる。

以上、今回の調査で遺跡東端部の状況の一部を明らかにすることができた。　（北野隆亮）

3. 川辺遺跡 第７次確認調査

調 査 地　和歌山市里字灰原31－１

調査面積　41.3㎡

位置と環境

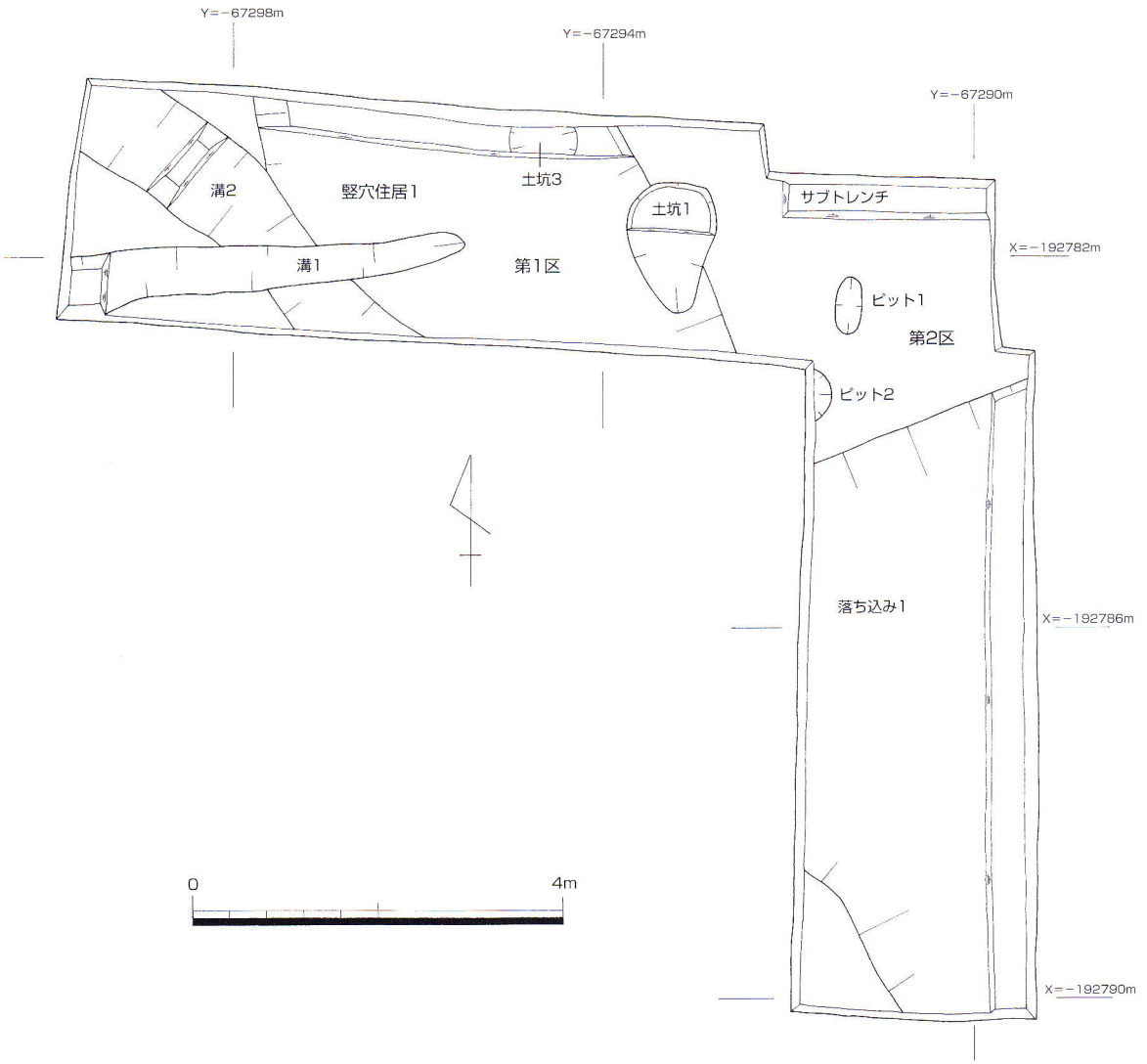
川辺遺跡第６次調査参照。

調査内容

調査は、調査対象地の北東隅にL字状の調査区を設定し、東西トレンチを第１区、南北トレンチを第２区とした。また、調査の進展に伴い第１区の北壁側に長さ7.4m、幅50㎝、第２区の東壁側に長さ7.2m、幅50㎝の拡張区を設定した。

調査内容

調査地の基本層序については、まず第１層として現代の耕作土と考えられる暗灰黄色細砂混シルト



第１・２区 遺構全体平面図

が堆積している。また第２層は明黄褐色粗砂混シルトであり、江戸時代の耕作土と考えられる。第３層以下は第２区サブトレンチによって確認したもので、第３層は、にぶい黄褐色粗砂混礫で、約25㎝の厚さで堆積している。また第４層は、１～10㎝大の円礫を含む褐色粗砂である。これら第３・４層は、遺物が全く認められなかったため自然堆積層と考えられる。

遺構は、第３層上面において古墳時代前期のものと考えられる土坑３をはじめ、中期以降のものと考えられる竪穴住居１や、それより後出する溝２及び土坑１、さらに溝２より後出する溝１の他、ピット１・２及び不定形な落ち込み１を検出した。遺構検出面の標高は、11.7m前後を測る。

写真１　第１区全景（西から）

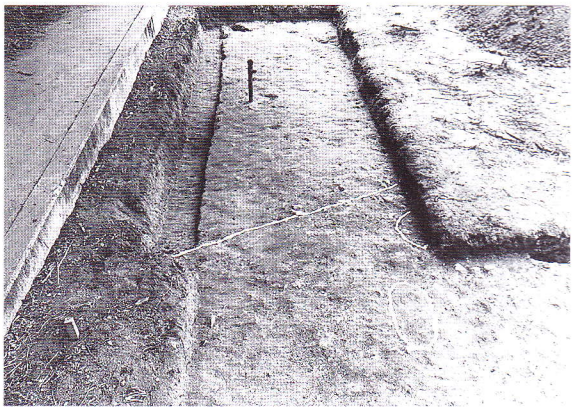


写真２　第２区全景（北から）

そのうち竪穴住居１は、第１区中央部において検出したもので、検出範囲は東西約3.6m、南北2.5m以上を測る。遺構の性格及び遺構残存深を確認する目的で、調査区北壁際において幅約30㎝のトレンチを掘削した結果、遺構覆土は単一で厚さ17㎝前後を測り、覆土内から土師器及び須恵器が出土した。また遺構底面は水平となる。よって、この遺構は古墳時代中期以降の竪穴住居と判断した。

この竪穴住居１の東辺に重複して検出した土坑１は、長径1.4m、短径約1.0mを測るもので、遺構の性格及び遺構残存深を確認する目的で北半部の掘削を行った結果、遺構底面において焼土の広がりを確認した。この焼土については、竪穴住居のカマドの可能性を考えておきたい。

調査で出土した遺物には、弥生土器、土師器、須恵器、瓦器、国産陶磁器、瓦、石器がある。これらの遺物は、各調査区の遺物包含層や遺構覆土から出土したもので、その出土量は遺物収納コンテナ１/２箱を数える。特筆するべきものは、弥生時代前期段階のものと考えられる土器片の他、サヌカイトの剥片が１点出土している。

まとめ

調査地南側隣接地における県センターの調査成果としては、庄内式併行期の竪穴住居をはじめ、飛鳥時代の竪穴住居の他、周囲に雨落ち溝がめぐる東西４間、南北４間以上となる総柱の掘立柱建物や溝、鎌倉時代の柵や火葬土壙などが検出されており、調査地周辺には庄内式併行期及び飛鳥時代、鎌倉時代に中心時期をもつ集落域が想定されている。その反面、古墳時代の遺構及び遺物については希薄な状況である。今回の調査では、遺構の種別としては竪穴住居の他、溝及び土坑など県センターの調査成果と共通する遺構群を確認した。よって調査地周辺は、その集落域の範囲内に含まれ、さらに北側に広がる可能性もある。　（藤薮勝則）

【参考文献】（財）和歌山県文化財センター『山口・川辺遺跡発掘調査報告書』　2005年

4. 川辺遺跡 第８次発掘調査

調 査 地　和歌山市里字灰原31－１

調査面積　約107㎡（うち約43.1㎡は遺構部分からの調査）

位置と環境

川辺遺跡第６次調査参照。

調査内容

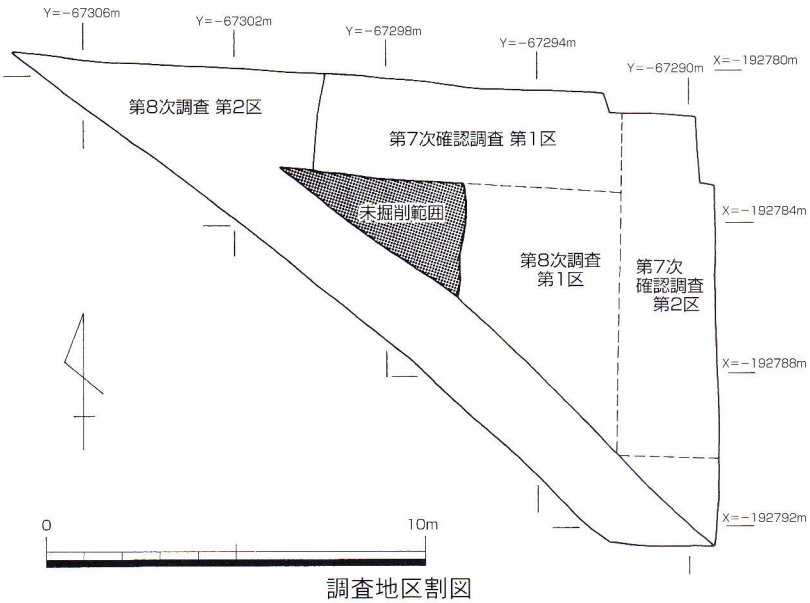
調査は、調査地が県道和歌山貝塚線の北側隣接地にあたり、現県道から調査地表面までの高低差及び調査地への進入路が狭小であることなど現土地区画の制限から、重機による表土等の掘削を断念し現地表面からすべて人力による掘削を行った。調査は、未掘削部分の東側、第７次確認調査範囲を含む部分を第１区とし、それ以外の部分を第２区として行った。掘削土については、調査対象地内に仮置きし、第１区の調査終了後、第１区を埋め戻し、その後第２区の調査を行った。

人力による掘削は、確認調査の成果をもとに、遺構面直上と考えられる第３層（にぶい黄褐色粗砂混礫）上面まで慎重に行った。また竪穴住居や溝及び土坑などの遺構掘削については、土層堆積観察用のセクションベルトを直交するライン上に設け、２層以上の堆積が認められるものは写真撮影及び土層断面実測による記録保存を行った。その他、遺構番号については第７次確認調査における遺構番号に連続して付すこととした。

図面による記録は、各調査区外に旧国土座標（日本測地系）の整数値を付した基準杭を設け、遺構全体平面図（縮尺１/20）の作成を手実測で行った。また土層断面図については１/20の縮尺を用い手実測で行った。土層の色調及び土質の観察は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版標準土色帖』を用い、水準値は国家水準点（T.P.値）を基準とした。

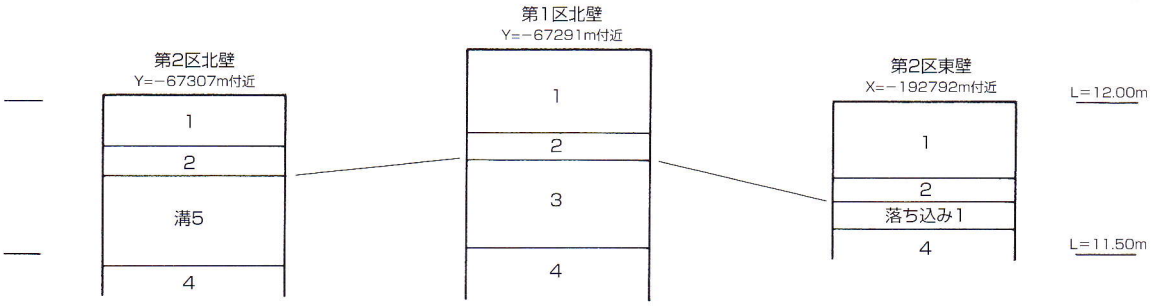
調査地の現況は荒蕪地であり、現在は廃材置場となっている。

調査地の基本層序については、まず第１層として旧畑作地の耕作土と考えられる暗灰黄色細砂混シルトが堆積している。この第１層は厚さ８～30㎝を測るもので、ビニールなどを含むことから現在の耕作土と考えられる。第２層は厚さ４～12㎝を測る明黄褐色粗砂混シルトであり、包含される遺物の時期から江戸時代の耕作土と考えられるものである。第３層は厚さ25㎝を測るもので、１～10㎝大の円礫を多く含むにぶい黄褐色粗砂混礫である。



調査地区割図

遺構は、この第３層上面において古墳時代初頭から平安時代にかけての竪穴住居をはじめ、



1　2.5Y5/2（暗灰黄）細砂混シルト
2　10YR6/6（明黄褐）粗砂混シルト
3　10YR5/4（にぶい黄褐）粗砂混礫（1～10cm大の円礫を多く含む）
4　10YR4/4（褐）粗砂（1～10cm大の円礫を含む）

調査地土層柱状模式図

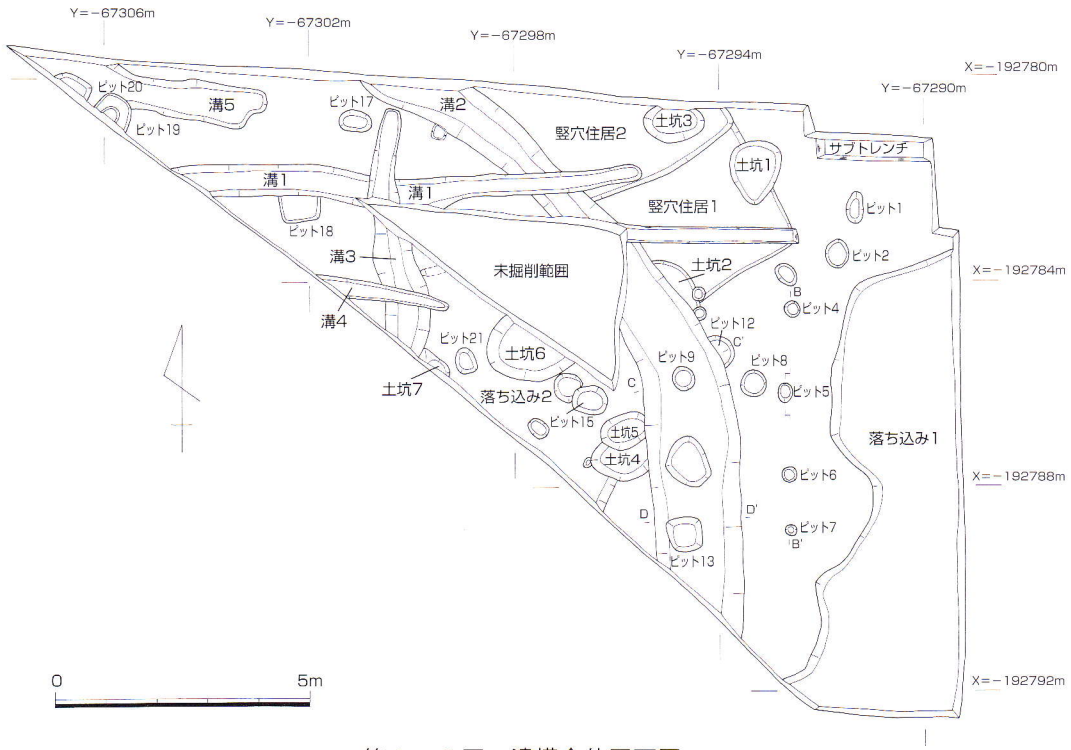
溝及び土坑、ピットを多数検出した。また第４層は、１～10㎝大の円礫を含む褐色粗砂である。これら第３・４層については、遺物が全く認められなかったことから自然堆積層と考えられる。

今回の調査では、第３層上面において古墳時代初頭のものと考えられる土坑３をはじめ、古墳時代中期以降の不定形な落ち込み１、古墳時代後期の竪穴住居１・２や土坑１の他、古墳時代のものとみられる土坑７、飛鳥時代の柱穴とみられるピット19・20や溝５、土坑６及び不定形な落ち込み２、奈良時代の溝２、平安時代の重複する溝１・３・４やピット13などを検出した。その他のものとしては、詳細な時期決定はできないものの、出土遺物から古墳時代のものと考えられるピット４・５・６・７・９を検出した。また遺構検出面の標高は、11.7m前後を測る。

以下、今回の調査で検出した主な遺構について、古い時期のものからその概略を説明する。

［古墳時代の遺構］

土坑３は、調査区北壁際の竪穴住居２底面において検出したもので、長径1.2m、短径60㎝以上、深さ22㎝を測る。遺構覆土は単一で灰黄褐色粗砂混シルトである。時期は出土遺物から古墳時代初



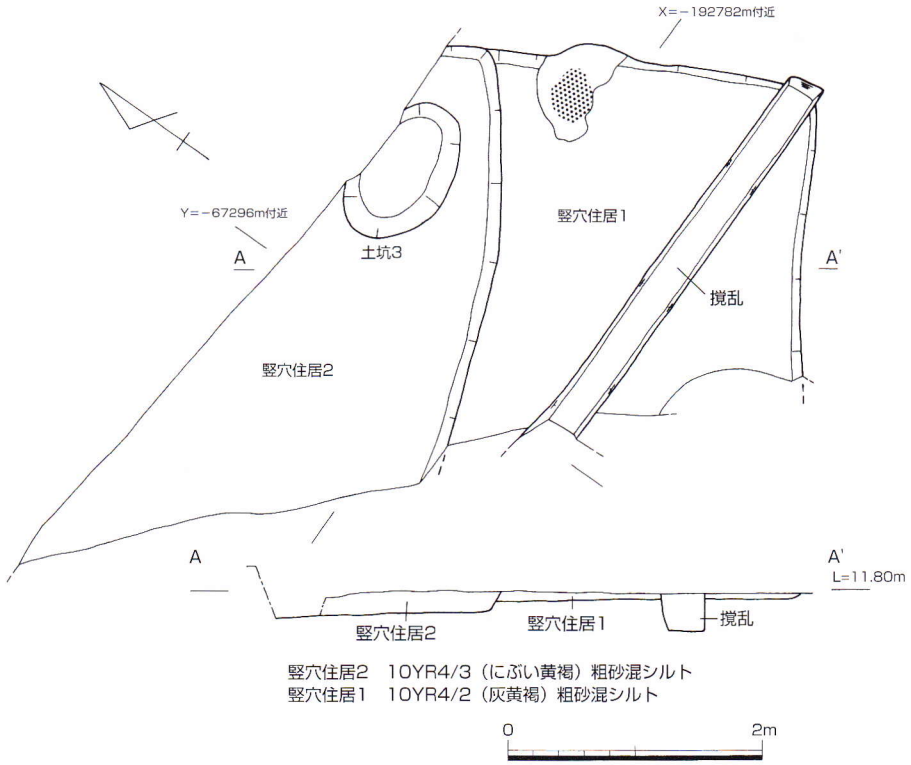
第１・２区　遺構全体平面図

頭と考えられる。

土坑７は、調査区南壁際の落ち込み２底面において検出したもので、南側は調査区外へ続き、西側は後世に掘削された溝３によって削平されている。遺構覆土は単一で黒褐色粗砂混シルトである。遺物としては、古墳時代中期のものと考えられる製塩土器が出土した。

竪穴住居１・２は、調査区の中央部北側において検出したもので、重複関係をもつ竪穴住居である。竪穴住居１は、東西2.3m以上、南北2.5m以上を測る平面方形の住居であり、その北側は竪穴住居２によって、また西側は後世に掘削された溝１・２によって削平を受けている。遺構覆土は薄く、にぶい黄褐色粗砂混シルトの単一層である。また、壁溝及び柱穴については確認できなかったものの、住居の東壁において住居内部へ弧状に張り出す粘質土を確認した。この粘質土は、その中央部が火を受けたことによって赤色化していることからカマドの痕跡と考えられる。竪穴住居２は、東西3.0m以上、南北3.0m以上を測るもので、北側は調査区外へと続き、西側は後世の遺構によって削平を受けている。遺構覆土は、厚さ17㎝前後を測る灰黄褐色粗砂混シルトの単一層である。壁溝及び柱穴、カマドについては確認できなかった。これらの住居の時期については、竪穴住居２の遺構覆土内に含まれる須恵器の年代観から、竪穴住居２が古墳時代後期とみられ、また竪穴住居１については、造り付けカマドが認められることや竪穴住居２と方向性を同じくする住居であることから、竪穴住居２にやや先行する時期のものと考えられる。

落ち込み２は、調査区の中央部南側において検出したもので、規模は後世に掘削された溝２・３の他、土坑及びピットによって削平を受けており不明である。遺構覆土は単一で黒褐色粗砂混シルトであり、円礫を多数含むものである。遺構の性格としては、遺構底面の状況が水平であることから竪穴住居の可能性も考えられる。時期については、遺構覆土内から出土した須恵器杯身（７）の時期から判断して古墳時代後期のものと考えられる。



竪穴住居１・２　遺構平面図及び土層断面図

ピット４・５・６・７は調査区の東側において検出したもので、周囲にこれらのピットに関連するとみられるピットが確認できないことから、南北方向の柵を構成するものと考えられる。これらのピットは直径20～30㎝、深さ16～26㎝を測るもので、中心間の距離はピット６～ピット７が1.1m、ピット４～ピット５及び、ピット５～ピット６がそれぞれ1.6mを測る。時期については出土遺物から古墳時代のものと考えられる。

［飛鳥時代の遺構］

溝５は、調査区の西端部において検出したもので、検出長4.5m、幅0.6～1.0m、深さは最深部で約30㎝を測る。またその方向性は、ほぼ東西方向である。時期については、遺構覆土内から出土した須恵器杯身（８）の時期から判断して飛鳥時代のものと考えられる。

土坑６は、調査区の中央部において検出したもので、東西1.6m以上、南北1.0m以上、深さ約20㎝を測る。遺構覆土は、単一で黒褐色粗砂混シルトである。時期については落ち込み２より後出するものの、遺構覆土から出土した須恵器杯蓋（６）の時期から判断して飛鳥時代のものと考えられる。

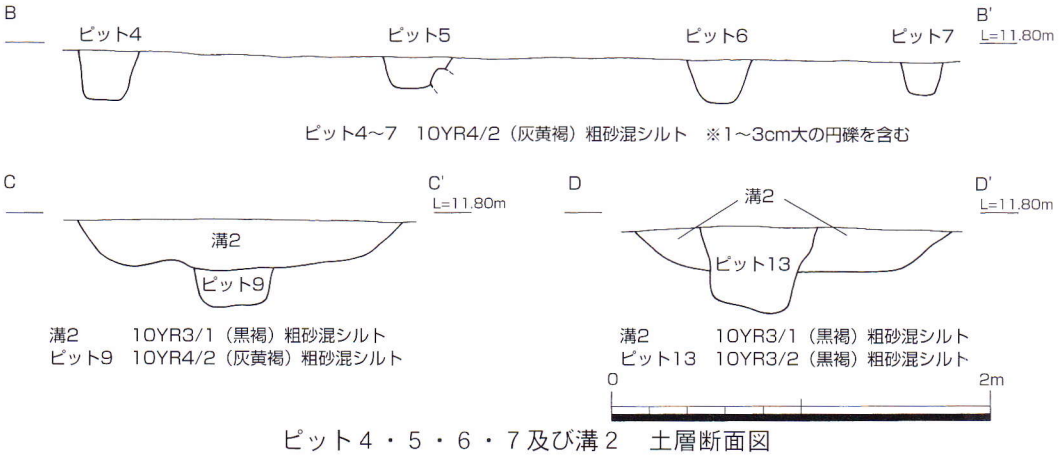
ピット19は、調査区の西端部において検出したもので、東西約60㎝、南北40㎝以上、深さ約25㎝を測る。このピットは、その中央部において直径約35㎝の柱痕が認められることから柱穴と考えられる。遺構覆土は、灰黄褐色粗砂混シルトであり、柱痕部分は黒褐色粗砂混シルトである。時期については溝５より後出するものの、出土遺物から飛鳥時代のものと考えられる。

［奈良時代の遺構］

溝２は、調査区の中央部を北西から南東にかけて弧状に検出したもので、検出長13.0m、幅0.7～1.8m、深さ15～25㎝を測る。遺構覆土は単一で、黒褐色粗砂混シルトである。また遺構底面の標高は、北端部で約11.6m、南端部で約11.5mを測り、その流路方向は北から南であったことがわかる。時期については、出土遺物及び遺構の重複関係から奈良時代のものと考えられる。

［平安時代の遺構］

溝１は、調査区の西半部において検出したもので、検出長9.0m、幅35～60㎝、深さは最深部で20㎝を測る。またその方向性は、やや蛇行するもののほぼ東西方向である。溝３は、溝１に後出するもので、検出長5.0m、幅40～85㎝、深さは最深部で約30㎝を測る。その方向性は、やや蛇行するもののほぼ南北方向である。溝４は、溝３に後出するもので、検出長2.7m、幅20～36㎝、深さは最深部で約５㎝を測る。またその方向性は、ほぼ東西方向である。これらの溝の時期は、遺構の重複関係や溝４の遺構覆土内に黒色土器が含まれることから、平安時代のものと考えられる。



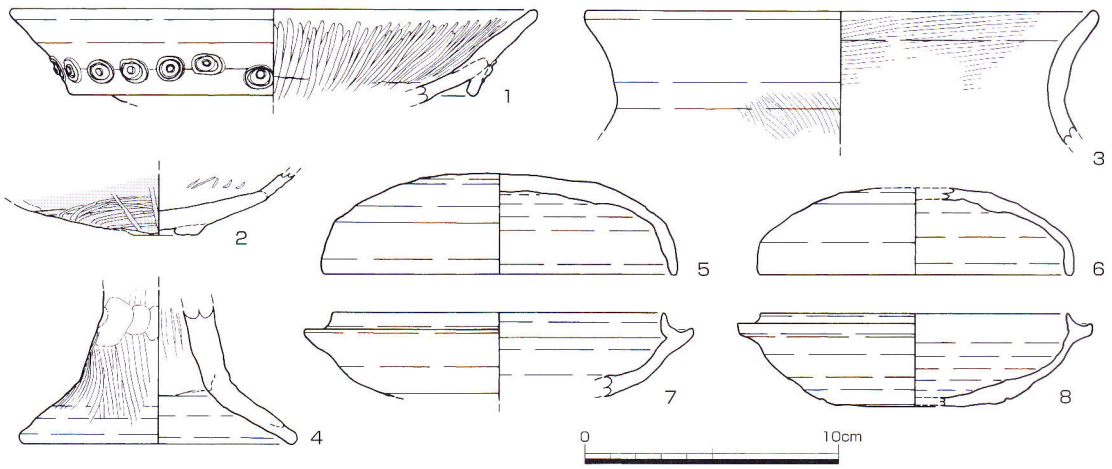
ピット４・５・６・７及び溝２　土層断面図

今回の調査で出土した遺物には、弥生土器、土師器、製塩土器、須恵器、黒色土器、瓦器、中世土師器、国産陶磁器、瓦、土製品、石器がある。これらの遺物は、各調査区の遺物包含層や遺構覆土から出土したもので、その出土量は遺物収納コンテナに３箱を数える。以下、主な遺物について説明する。

１～４は土師器である。１は二重口縁壺で、口径20.5㎝を測る。破断面の観察から口縁部の製作方法が明瞭に観察できるもので、２次口縁を接合した後、接合部外面に垂下する粘土帯を貼り付けて、円形浮文及び竹管文で加飾している。内外面の調整は、外面にヨコナデが施されており、内面にはタテ方向のヘラミガキが明瞭に認められる。２は壺の底部とみられるもので、底径3.0㎝を測る。底部は丸底の底面に粘土紐を貼り付け、小さく低い高台状に成形したものである。内外面の調整は、外面の底部付近にヘラミガキ及びその上部にヘラケズリが認められ、内面には板状工具によるナデが施されている。また外面には黒斑が認められ、内面には調整時の工具痕と考えられる筋状の圧痕がヨコ方向に連続してみられる。３は甕で、口径20.0㎝を測る。内外面の調整は、外面にタテ方向のハケがみられ、また内面にはヨコ方向のハケが施されている。４は高坏の脚部であり、脚部径10.6㎝を測る。内外面の調整は、外面の調整としてタテ方向のハケの後、脚部端にヨコナデが施されており、また脚柱部には指オサエが認められる。以上の遺物の時期は、１・２が古墳時代前期（布留式併行期古段階）のものとみられ、３・４が古墳時代後期以降のものと考えられる。

５～８は須恵器である。そのうち５・６は杯蓋である。５は口径14.0㎝を測るもので、外面天井部の約２／３の範囲に回転ヘラケズリが施されており、口縁部及び内面はヨコナデによって仕上げられている。６は口径12.3㎝を測るもので、外面天井部の約１／２の範囲に回転ヘラケズリが施されており、口縁部及び内面はヨコナデによって仕上げられている。また７・８は杯身である。７は口径13.0㎝を測り、口縁部が緩やかに外反し短くのびるものである。内外面の調整にはヨコナデが施されており、底部付近にヘラケズリが認められる。８は口径12.1㎝を測り、口縁部が７と比較して直線的で短くのびるものである。内外面の調整にはヨコナデが施されており、底部にはヘラ切りの痕跡を消すためとみられる回転ヘラケズリが施されている。以上の遺物の時期は、５が古墳時代後期（TK－43型式）、７が古墳時代後期末（TK－209型式）のものとみられ、６・８が飛鳥時代（飛鳥Ⅰ～Ⅱ期）のものと考えられる。

これらの遺物の出土位置は、１・７が落ち込み２、２が竪穴住居１、３・６が土坑６、４が溝２、５が溝３、８が溝５である。



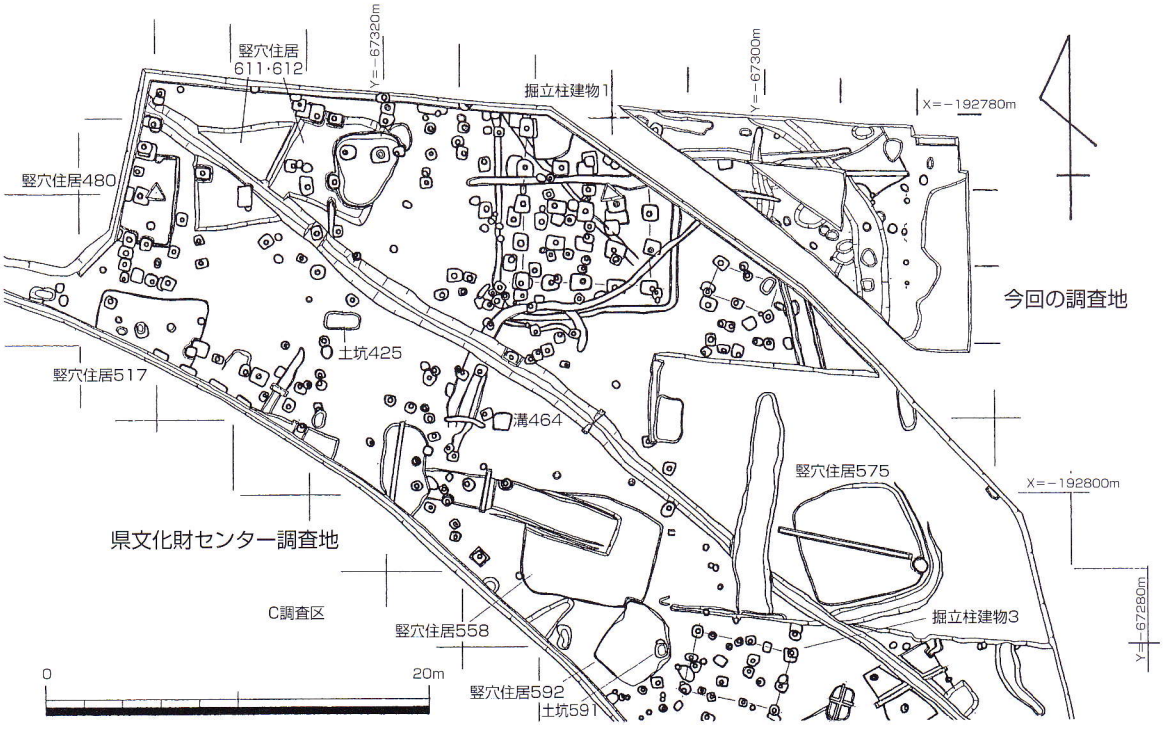
遺物実測図

まとめ

今回の調査地周辺では、南側隣接地において県センターが行った調査成果として、庄内式併行期の竪穴住居をはじめ、飛鳥時代の竪穴住居、また周囲に雨落ち溝がめぐる東西４間、南北４間以上となる総柱の掘立柱建物や溝、鎌倉時代の柵及び火葬土坑などが検出されており、これらの遺構群から庄内式併行期及び飛鳥時代、鎌倉時代に中心時期をもつ集落域が想定されている。その反面、古墳時代の遺構及び遺物については希薄な状況である。今回の調査では、古墳時代後期のものと考えられる竪穴住居及び、遺構の重複関係から平安時代のものとみられる溝１・３・４などを検出した他、出土遺物としても古墳時代後期のものと考えられる須恵器杯蓋（５）や杯身（７）などが少量ではあるものの出土した。これらの遺構及び遺物は、調査地周辺における集落存続期の空白期を埋めるものと考えられ、古墳時代や平安時代の集落域とその規模を示す重要な手がかりとなるものである。またピット19・20は、その位置関係や出土遺物から、前述した飛鳥時代の雨落ち溝がめぐる掘立柱建物を構成する柱穴である可能性が高い。これらのピットは、掘立柱建物の東端柱列を構成するもののひとつと考えられる。さらにその他にも県センターが検出した溝の北側延長部分とみられる溝２や、東側延長部分と考えられる溝１・４などを確認することができた。これらの遺構群は、今回の調査地周辺が飛鳥時代及びそれ以降も連続して集落域が形成されてきたことを示す遺構と考えられる。

以上、県センターの調査成果と今回の調査成果を遺構及び遺物の両面から比較検討してきた。今回の調査は小面積ではあるものの、古墳時代後期の集落域を示す遺構及び遺物が少ないながらも存在し、また調査地北側への広がりを確認することができた。このことは、川辺遺跡内部の各時代における集落の変遷やその範囲を知る上で重要な成果と考える。（藤薮勝則）

【参考文献】（財）和歌山県文化財センター『山口・川辺遺跡発掘調査報告書』2005年



調査地周辺の遺構配置図

5. 西田井遺跡 第２次調査

調 査 地　和歌山市西田井字桑ノ本101番２

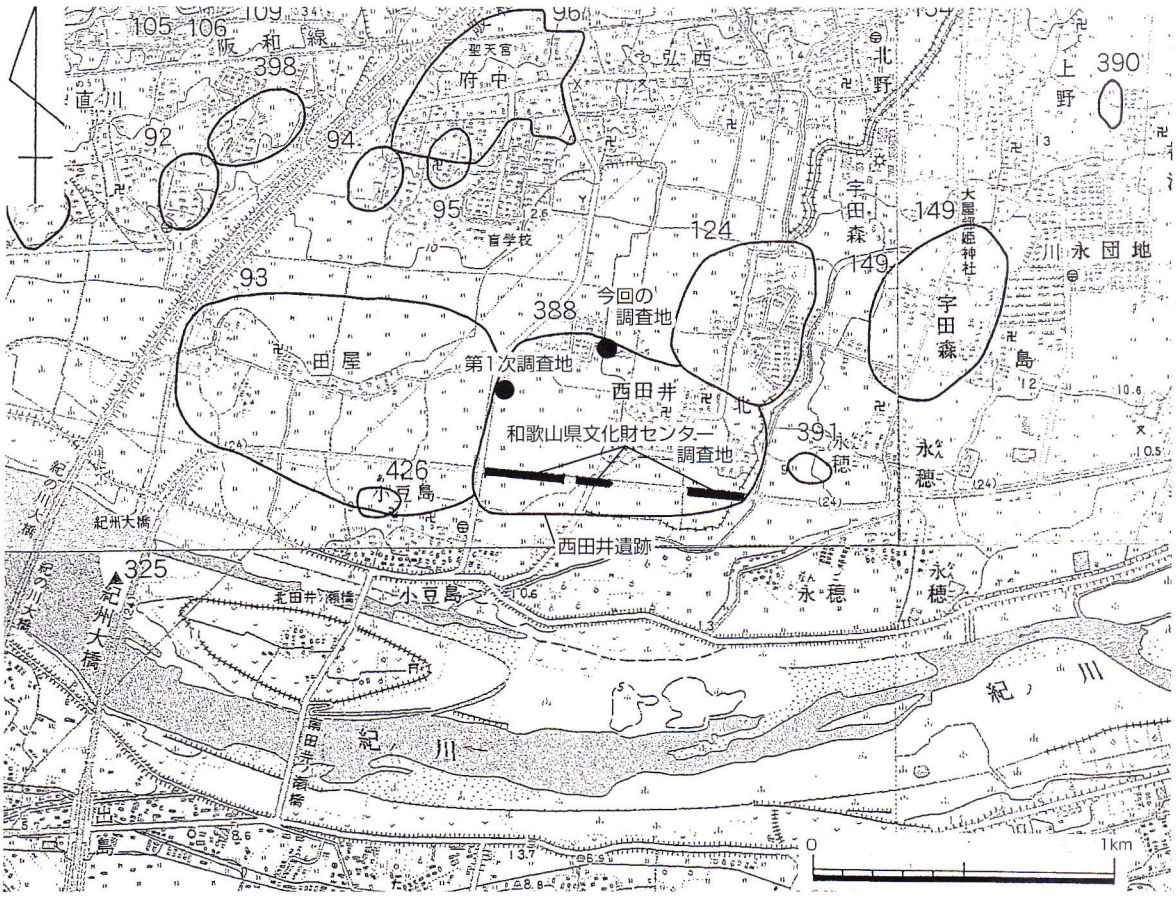
調査面積　45㎡

位置と環境

西田井遺跡（遺跡番号388）は、紀ノ川下流北岸の標高7.0m前後の沖積平野に立地する。遺跡は南北約700m、東西約1.0㎞の範囲をもつもので、平野部でも微高地にあたる地点に位置し、弥生時代から中世にかけての大規模な複合遺跡である。

西田井遺跡における過去の調査では、財団法人和歌山県文化財センターが国道バイパス建設に先立ち昭和59年度から３箇年にかけて面積11,000㎡の調査を行った。この調査では、弥生時代から江戸時代に至る集落関係の遺構が多く検出され、遺物は縄文時代から江戸時代にかけてのものが大量に出土している。また、財団法人和歌山市文化体育振興事業団が平成６年に遺跡西縁部の老人ホーム建設予定地で発掘調査（第１次）を行った。この調査では、平安時代中期と古墳時代中期の遺構面を検出した。平安時代中期の遺構は小溝とピットであり農耕関係のものとみられ、古墳時代中期の遺構は竪穴住居３棟などで、造り付け竈や貯蔵穴をもつものである。遺物は須恵器や土師器の他、丸底の製塩土器などが出土し、土師器には韓式系のものがみられた。

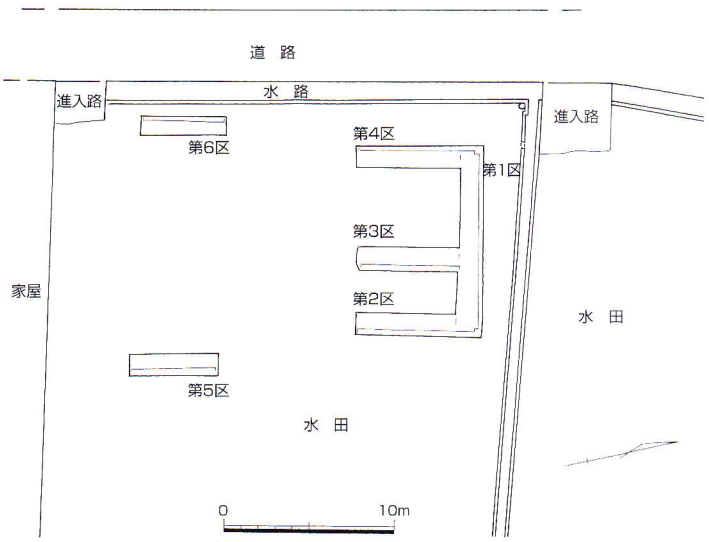
今回の調査は、遺跡北端部において住宅建設が計画されたことから、工事に先立ち確認調査を実施したものである。



西田井遺跡周辺の遺跡分布と既往の調査地

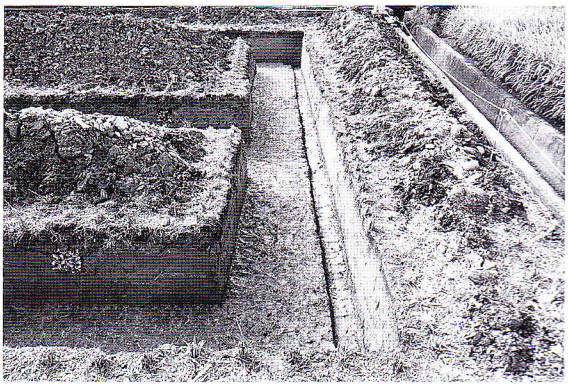
調査内容

調査地は遺跡範囲北端部に位置し、調査対象地の北端部に南北幅1.2m、東西長11mの第１区、第１区の両端及び中央部に接続する形で東西幅1.2m、南北長６mの調査区を東から第２～４区として設定した。また、調査地南東端部及び南西端部に東西幅１m、南北長５mの調査区を設け、南東のものを第５区、南西を第６区とした。



調査地区割図

調査地の地表面標高は約7.5mを測る。表土は厚さ15～20cmの厚みの水田耕土（第１層）である。第２層は厚さ約５cmの褐色の粗砂混シルトであり、床土に相当するとみられる層である。第３層は10～15cmの厚みをもつ暗灰黄色の粗砂混シルトが堆積する。第４層は10～15cmの厚みの灰オリーブ色のシルト、第５層は厚さ約５cmの黄褐色のシルト、第６層は厚さ15～25cmの黄褐色のシルトがそれぞれ堆積する。また、第７層は20cm以上の厚みをもつ黄褐色のシルトで、遺物が出土しなかったことから自然堆積層と考えられる。


第１～４区全景（東から）

今回の調査では遺構を検出しなかったが、第１層から第６層までは遺物を包含する層であり、土層堆積の状況から耕作に関係したものと考えられる。なお、第６層から平安時代後期頃の遺物が出土しており、調査地周辺の農地開発の時期を示す可能性がある。また、第７層以下は遺物を出土しない自然堆積層であると考えられる。

遺物は、土師器、須恵器、瓦器、中世土師器、瀬戸・美濃系陶器、肥前系陶磁器、堺焼擂鉢などが出土した。第１層から第６層までの堆積層から出土したもので、全て小破片であり、周辺から調査地内に流れ込んだものと考えられる。

まとめ

以上、今回の調査では、中世以前の遺構面を検出することはできなかった。なお、調査地の土層堆積は基本的に水平堆積であり、これらの遺物を包含する層は農耕に関連して形成されたものと考えられる。第６層から12世紀代の瓦器椀が出土しており、調査地周辺の農地開発の時期を示す可能性がある。また、調査地内では第１区で比較的遺物の出土が多い傾向がみられることから、調査地の北側から遺物が流れ込んだものと考えられ、これらの遺物を用いた集落は調査地の北側に展開していたものと考えられる。

（北野隆亮）

【参考文献】『和歌山市埋蔵文化財発掘調査年報４』（財）和歌山市文化体育振興事業団　1997年
『和歌山市内遺跡発掘調査概報　－平成19年度－』和歌山市教育委員会　2009年

6. 雑賀崎台場跡 確認調査

調 査 地　和歌山市雑賀崎地内

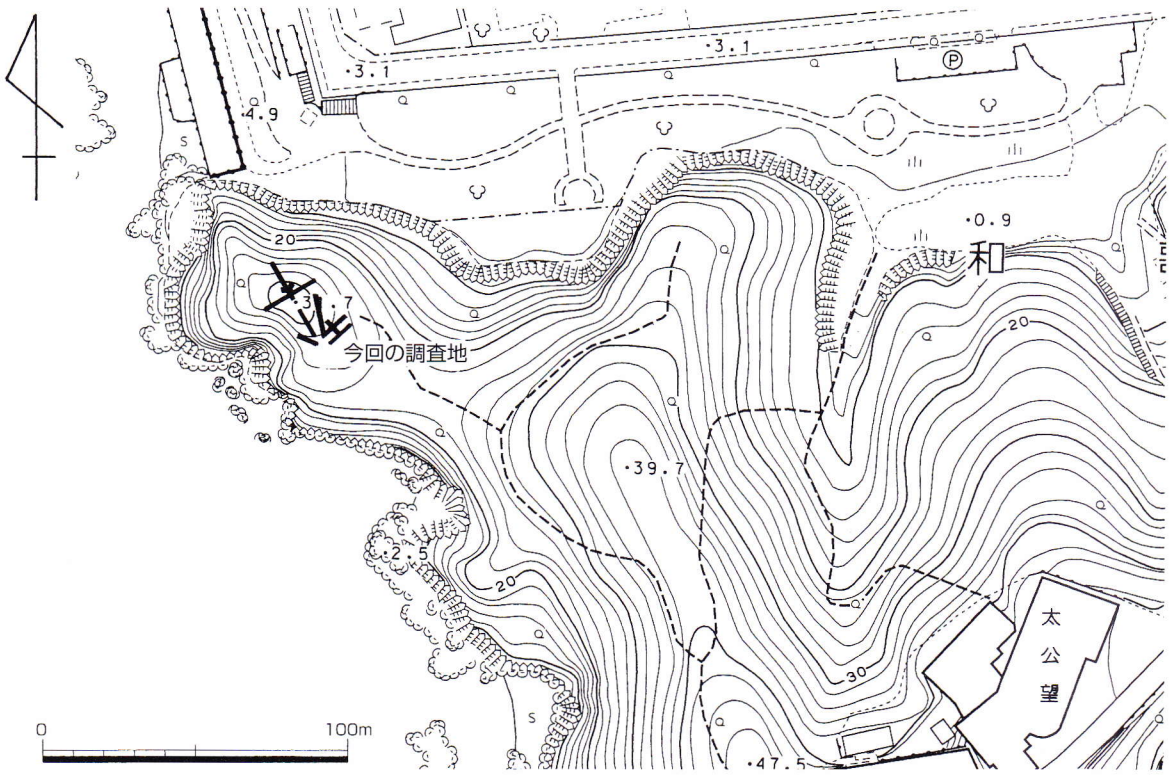
調査面積　70.3㎡

位置と環境

雑賀崎台場跡は、和歌山市雑賀崎の北端部、紀伊水道に突出した俗称「トンガ」の鼻または「台場」の鼻と呼ばれる岬の先端部に位置する。周辺の遺跡には、集落遺跡である関戸遺跡及び、古墳時代後期の横穴式石室をもつ関戸古墳の他、天神山古墳や高津子山古墳などが立地している。さらに、初代紀州藩主徳川頼宣の時代に朝比奈段右衛門が寛永年間（1624～1644）に約13年間かけて築造した県史跡水軒堤防がある。

雑賀崎台場跡は、俗称「カゴバ」台場遺跡とも呼ばれ、江戸時代の砲台跡として周知されてきた遺跡であり、昭和７年刊行の「和歌山県史蹟名勝天然記念物調査報告」第11輯には「東西ノ両側面及ビ北ノ全面ニハ三尺乃至八尺ノ高サニ石垣ヲ設ケ其ノ上ニ土塁ヲ繞シ・・・土塁ノ厚サハ其ノ下部ニ於テ約四尺高サ二尺五寸乃至四尺五寸・・・」と記され、台場を巡る石垣及び土塁の平面図とともに遺跡の構造が報告されている。

この遺跡は、調査前の現状確認において、石垣上部に平坦面を設けた台場の他、その南東部に台場に取り付く方形壇が認められ、方形壇の東面及び南北面にも石垣が廻らされていることを確認した。また台場北部は、後世の地形改変によって石垣及び土塁が崩落し、石垣自体も倒木などの影響により各所で崩落の危険性が認められた。このような遺跡の現状から、台場跡の構造及び構築時期を知る目的で確認調査を行うこととなった。



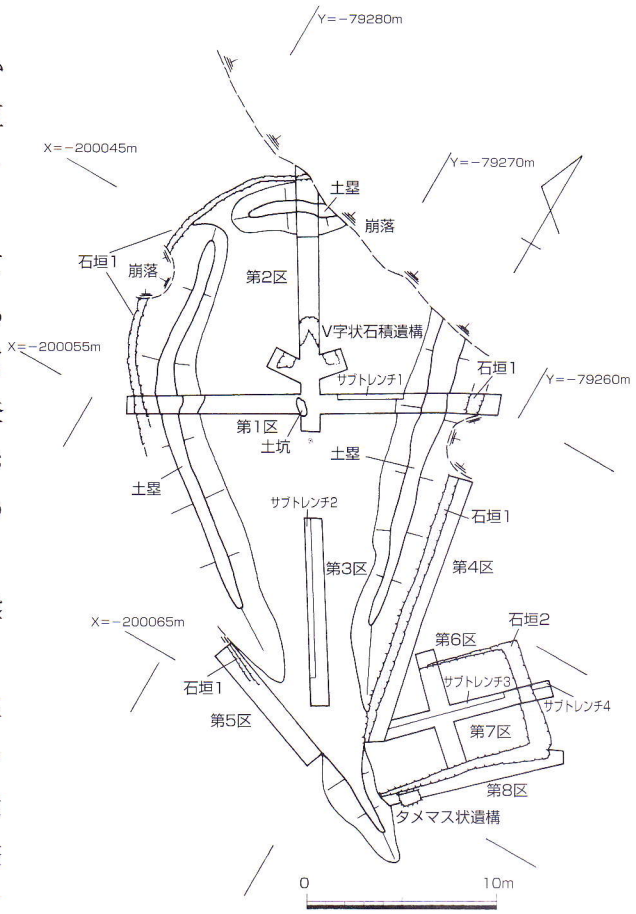
調査位置図

調査の内容

調査は、台場本体とそれに付属する方形壇について、その構造及び規模を確認する目的で第１～８区の調査区を設け行った。これらはすべて幅約１mのトレンチによる調査であり、調査面積は70.3㎡である。

遺跡が立地する岬は結晶片岩によって形成されており、現況は雑木林であるものの、調査対象地である台場上部や方形壇上部の平坦面は畑地として利用されていたようである。調査地の基本層序は、調査地全体に現表土である腐葉土（第１層）が堆積しており、それを除去した下位層が近代から現代にかけての耕作土と考えられるにぶい黄褐色粗砂混シルト（第２層）である。これら第１・２層を除去した下位面が岩盤もしくは岩盤風化土であり、遺跡形成の地盤である。ただし、この岩盤上部には起伏が認められるため、主に台場の東部及び方形壇は整地を行い形成されている。この整地土は１～５単位に細分が可能である。遺構検出面については、台場構築の際に持ち込まれた整地土の上面及び、この遺跡が立地している岬を形成する結晶片岩の岩盤及び岩盤風化土の上面である。

調査では、台場に関わる遺構として、台場を廻る石垣１及びその上部に構築された土塁、台場上部の平坦面においてＶ字状石積遺構などを検出した。また方形壇に関わる遺構には、同じく方形壇を廻る石垣２及び、第８区西端部で検出した近代以降のものと考えられるタメマス状遺構がある。ただし、台場及び方形壇上部おいて砲台や建物に関わる明確な遺構は確認することができなかった。



遺構全体平面図

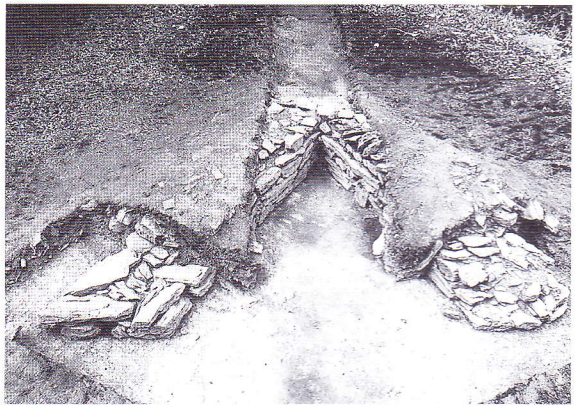


写真１　Ｖ字状石積遺跡

まとめ

遺跡の形成時期は、台場及び方形壇の構築に関わる整地土内に18世紀後半から19世紀前半のものと考えられる肥前系染付碗及び鉢や瀬戸・美濃系陶器碗、堺焼擂鉢、萩焼碗小片の他、瓦片が含まれていることから、18世紀後半以降のものと考えられる。また遺跡の形成過程としては、遺跡が立地する結晶片岩の岩盤上部の凹凸を整地することによって平坦面を造成し、台場及び方形壇を廻る石垣の構築が行われたと考えられる。このことは石垣１・２の基底石が台場及び方形壇の構築に関わる整地土の上部に設置されていることからも分かる。その後、台場を廻る石垣１の上部に土塁が構築されるという順序が考えられる。

（藤藪勝則）

7. 茶臼山古墳 第３次調査

調査地　和歌山市木ノ本766－１番地

調査面積　21.0㎡

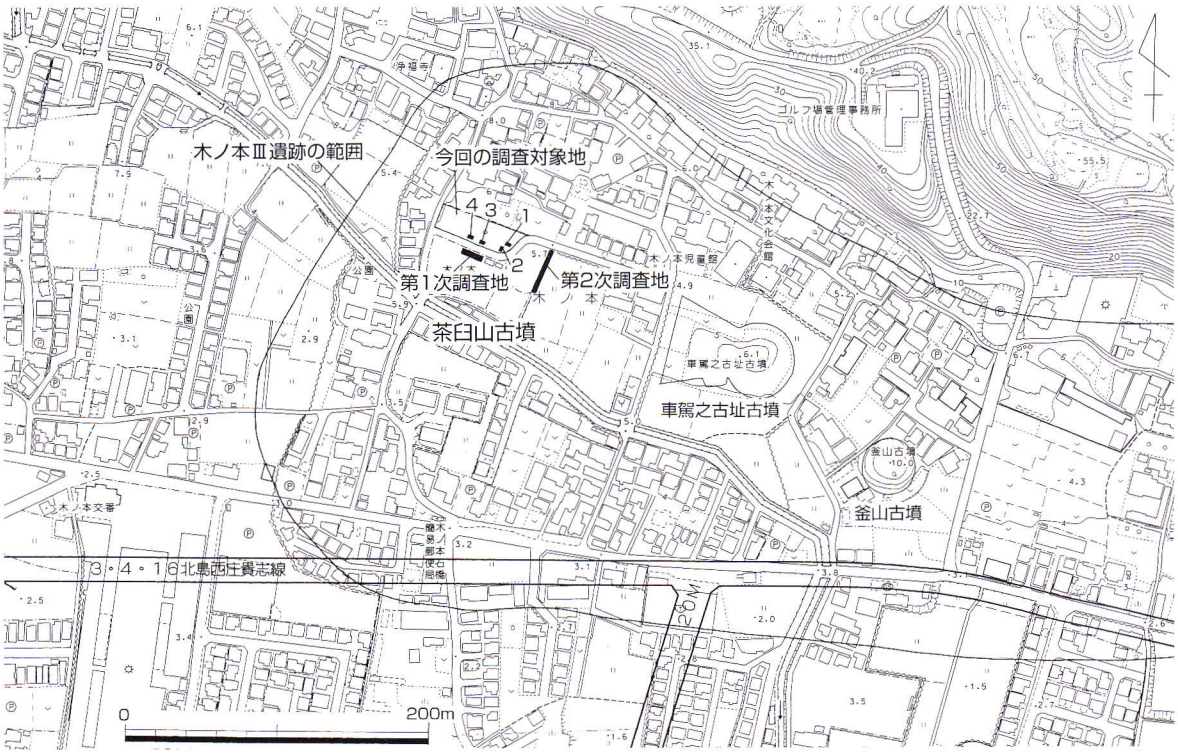
位置と環境

和歌山市域の北西部にあたる和歌山市木ノ本に所在する茶臼山古墳は、紀ノ川北岸の標高5.5m前後の沖積段丘上に立地する。この古墳が含まれる木ノ本古墳群にはこれまで３基の古墳が確認されている。今回調査を行った茶臼山古墳ではこれまで２度にわたる調査が行われ、後円部径36mの前方後円墳である可能性が考えられている。また、この木ノ本古墳群を含む周囲は土師器・須恵器などが散布する木ノ本Ⅲ遺跡としても周知されており、調査地は木ノ本Ⅲ遺跡の西端部としても位置づけられる。

調査内容

今回の調査は、工事計画範囲約850㎡の内、前方部の推定範囲を中心として調査区長3.0～4.0m、幅1.5mの調査区を４ヶ所設定して行った。調査区は、後円部墳丘裾部の確認を目的とした第１区、くびれ部裾部の確認を目的とした第２区、前方部の北西端裾部の確認を目的とした第３区、外堤部の位置確認を目的とした第４区として設定した。

全体的な基本層序は、上位から現代の耕作土（第１層）と整地層（第２層）が堆積し、その下層には整地以前の近現代の旧耕作土（第３層）が堆積する。第４層は、黄褐色系のシルト混粗砂で第３層の床土にあたる層位である。第５層は黄褐色系の堆積層で江戸時代の遺物を含む。また第６層も江戸時代の遺物を含む堆積層で、礫の包含で上下２単位に細分した。さらに下層の第７層は第１・２区



調査位置図（数字番号は調査地区番号を示す。）

では黒褐色、第３・４区では灰黄褐色系の土色をもつ土層で鎌倉時代の遺物を多く含む土層である。第８層は埴輪片を比較的多く含むにぶい黄褐色系の土層で古墳時代の堆積層と考えられる。そして、第９層は古墳の周濠及び外堤を形成するベース層と考えられ、各調査区とも遺物の出土は認められなかった。

本古墳に伴う遺構としては、第１区の第９層上面である標高3.60m付近で周濠底面を検出し、さらに、より後円部に近い位置である東端部で35㎝程度落ち込む部分を検出し、この落ち込みにも埴輪片が包含することを確認した（写真１）。このことから、古墳周濠底面は必ずしも水平ではなく墳丘の近辺を深く掘削している可能性が考えられた。第２区では周濠底面と考えられる第９層上面は標高3.55mでほぼ水平となり、第１区同様調査区全体が周濠内部にあたるものと考えられた。第３区では周濠底面と考えられる第９層上面では、外堤への立ち上がりと考えられる外堤内側裾部のラインを検出した。また、周濠底面の標高は3.45mである。そして、第４区では第９層上面の標高は4.10mと他の調査区に比べ65㎝程度高くなることを確認した（写真２）。調査区中央部から東側は、第８層の堆積があり、緩やかに落ち込んでいく状況を検出し、このラインが残存外堤内側頂部であるものと考えられた。調査区北東隅部の第８層内において円筒埴輪がまとまって出土しており、外堤部から転倒した一群とみられたことから残存外堤内側頂部がほぼ確実なものと推定できた。

写真１　第１区濠内部の状況（西から）

写真２　第４区外堤部の状況（東から）

まとめ

今回の調査成果から、第１～３区の周濠底面の標高は3.40～3.60mであり、第１次調査において検出された外堤頂部（3.50m）との比高差がほとんどなく、濠というイメージとは異なった状況となる。また第２次調査で検出された周濠底面（3.20m）とも20～40㎝の高低差が認められるものの、第１区で東側に落ち込む部分の底面の標高にほぼ一致する。したがって、今回の調査で検出された周濠底面が確実なものとすれば、少なくともこの古墳北側の周濠は水濠として機能しないこととなる。さらに、第４区で検出した外堤部と考えられる部分の標高は4.10mであることから第１次調査において検出された外堤頂部との高低差が60㎝程度あり、南側に向け下降する外堤であることも考えられる。今回の調査から新たに判明したこととして、①古墳の主軸が８°北に傾きほぼ真北に直交する方向となったこと、②残存墳頂径及び後円裾部径が約２m小さくなり、残存墳頂径27m、後円裾部径34mとなることが挙げられる。

（井馬好英）

【参考文献】「④茶臼山古墳第３次調査」『和歌山市内遺跡発掘調査概報－平成19年度－』
和歌山市教育委員会2009年

8. 中野遺跡 第３次調査

調 査 地　和歌山市中野51－５、50－９

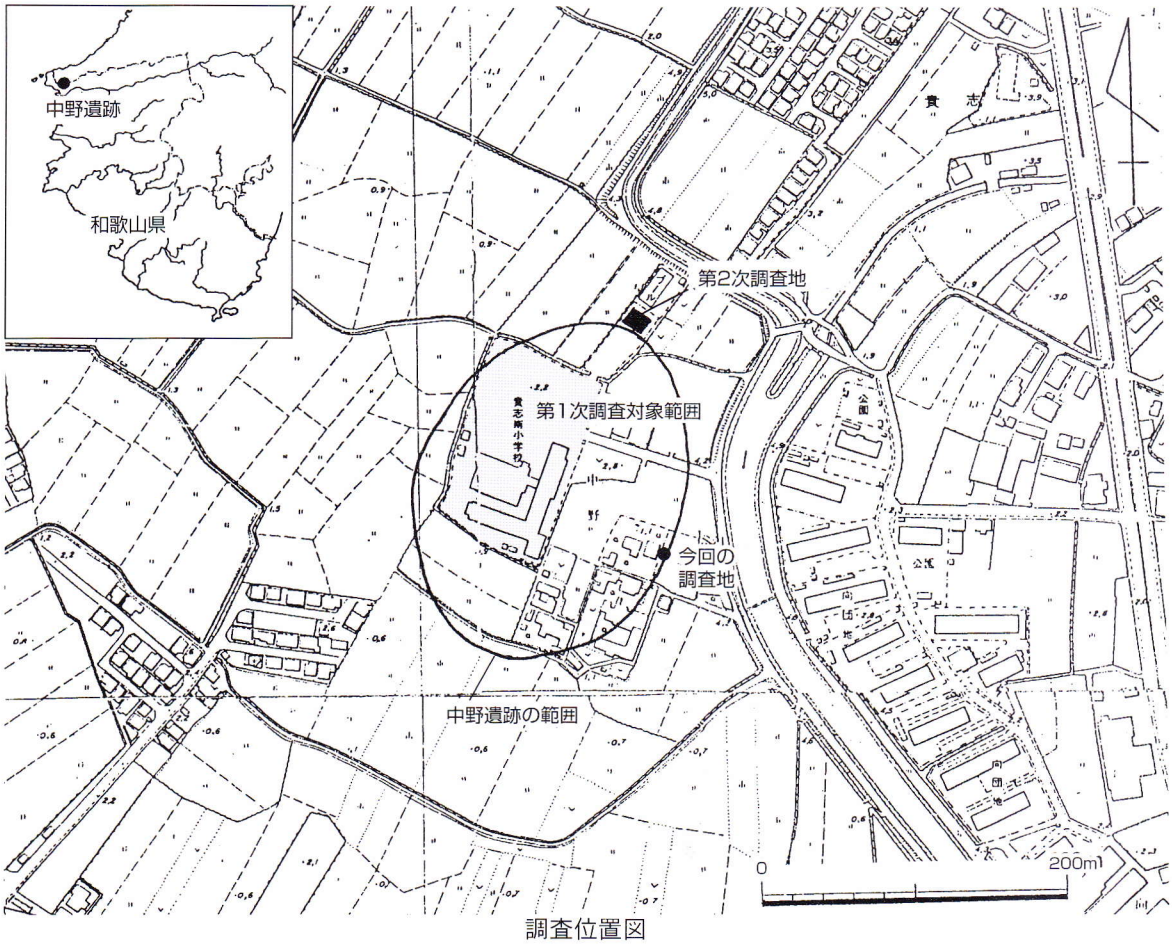
調査面積　20㎡

位置と環境

中野遺跡（遺跡番号48）は、紀ノ川下流北岸の標高１m前後に位置し、和泉山脈から派生する土入川により形成された扇状地末端部の平野域に位置する。遺跡は南北250m、東西200mの範囲をもつ古墳時代の遺物散布地と考えられてきたが、和歌山市教育委員会が遺跡北部で行った第１次調査で室町時代の大溝などの遺構や輸入陶磁器・備前焼大甕など多量の遺物を確認したことから、当地に勢力をもった雑賀衆の中野城跡であると推定された。

中野遺跡における過去の調査では、財団法人和歌山市文化体育振興事業団が平成９年に遺跡北縁部の小学校プール建設予定地で第２次調査を行っている。遺構は検出されなかったが、中世の遺物包含層を３層確認した。出土遺物としては、弥生時代のものは弥生土器、叩石、磨石、サヌカイト剥片、古墳時代のものは須恵器壺・甕、土師器、埴輪、平安時代では黒色土器椀、鎌倉時代では瓦器椀、土師器皿・釜、東播系須恵器こね鉢、室町時代では土師器皿・堝、瓦質土器羽釜、中国製青磁碗、備前焼大甕などがある。

今回の調査は、遺跡南東端部において宅地造成が計画されたことから、工事に先立ち確認調査を実施したものである。



調査位置図

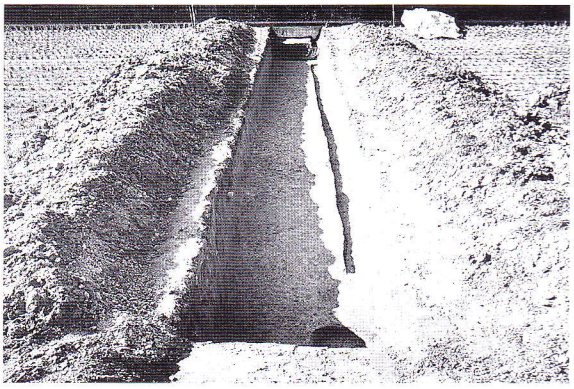
調査内容

調査地は、遺跡範囲南東端部に位置するもので、現況の水田に南北幅1.5m、東西長13.3mの調査区を設定した。

調査地の地表面標高は約1.3mを測る。表土は厚さ約15cmの厚みの水田耕土（第１層）である。その下層には第１層に類似した第１'層が厚さ５～10cmで西から東に向かって緩い傾斜をもち堆積する。その堆積の状況から第１'層は耕作に関係したものと考えられる。第２層は厚さ10～15cmの褐色の粗砂混シルトであり、床土に相当するとみられる層である。第３層は厚さ20cmのオリーブ褐色の粗砂混シルトが堆積する。第４層は約15cmの厚みの暗灰黄色の粗砂混シルトで、第５層は約10cmの厚みをもつ灰色のシルトが堆積する。この第５層上面まで順次人力により全面掘削を行い、以下の土層堆積は西壁に沿って深掘調査区を設定し、第６層は10cm以上の厚みをもつ灰色の粗砂であることを確認した。

1　2.5Y4/1（黄灰）粗砂混シルト
1'　2.5Y5/1（黄灰）粗砂混シルト
2　10YR4/4（褐）粗砂混シルト
3　2.5Y4/3（オリーブ褐）粗砂混シルト
4　2.5Y4/2（暗灰黄）粗砂混シルト
5　5Y5/1（灰）シルト混粗砂
6　5Y4/1（灰）粗砂

調査地土層柱状模式図



調査区全景（東から）

第１'層から江戸時代末頃の遺物が出土したが、第２層以下の層位からは遺物の出土はみられなかった。

今回の調査では、第３層上面、第４層上面、第５層上面の３面に対して遺構検出作業を行った。その結果、全ての面で遺構を検出することはできなかった。また、第２層以下の層位からは遺物の出土はみられなかったことなどから、第２層以下は自然堆積層であると考えられる。

なお、土層堆積の状況から耕作に関係したものと考えられる第１'層から江戸時代末頃の遺物が出土しており、調査地周辺の農地開発の時期を示す可能性がある。

遺物は、瓦質火鉢、肥前系染付碗、堺焼擂鉢、大谷焼徳利、平・丸瓦などが少量出土した。遺物の大半は第１'層から出土したもので、全て小破片である。ほとんどが江戸時代後期から近代のものであるが、瓦質火鉢１点と火を受けて赤変した丸瓦１点が中世のものと考えられる。なお、これらの中世遺物は周辺から調査地内に流れ込んだものとみられる。

まとめ

今回の調査では、中世以前の遺構面及び遺物包含層を検出することはできなかった。調査地の基本的な土層堆積は自然堆積とみられ、調査地の農地への開発時期は江戸時代頃と考えられる。

以上、本調査地は、中野遺跡の範囲外であると考えるのが妥当である。　（北野隆亮）

【参考文献】『中野遺跡　第２次発掘調査概報』（財）和歌山市文化体育振興事業団　1998年
『和歌山市内遺跡発掘調査概報　－平成19年度－』和歌山市教育委員会　2009年

9．府中Ⅳ遺跡 第３次確認調査

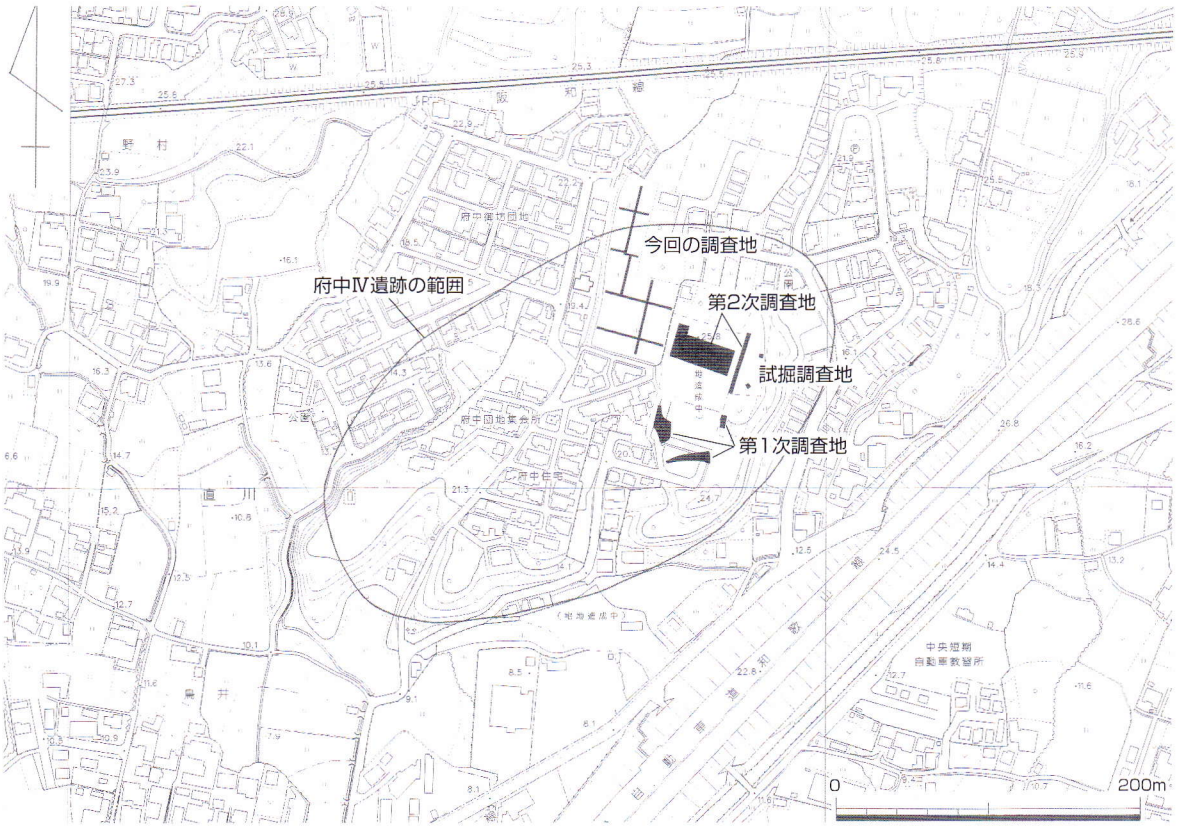
調 査 地　和歌山市府中字長通り315番６、318番、322番、323番

調査面積　249㎡

位置と環境

府中Ⅳ遺跡は、紀ノ川河口から約９㎞上流の北岸に位置し、標高約25ｍの段丘上に立地する。この遺跡は東西約350ｍ、南北約250ｍの範囲に広がるもので、弥生時代後期から古墳時代前期及び、奈良時代、鎌倉時代の集落遺跡である。当遺跡における過去の調査では、平成６年に（財）和歌山市文化体育振興事業団が行った第１次調査及び、平成８年に和歌山市教育委員会が行った試掘調査、また試掘調査成果をうけて市事業団が行った第２次調査がある。そのうち第１次調査では、弥生時代後期の竪穴住居、弥生時代から古墳時代前期にかけての竪穴住居や溝及び土坑などが検出されており、第２次調査では弥生時代後期から古墳時代前期にかけての竪穴住居や掘立柱建物をはじめ、奈良時代の掘立柱建物及び土坑、鎌倉時代の掘立柱建物の他、江戸時代に埋没した井戸などが検出されている。

周辺の遺跡では、本遺跡の南１㎞には田屋遺跡や西田井遺跡などがあり、弥生時代中期から後期にかけてのベッド状遺構や貯蔵穴を伴う竪穴住居、掘立柱建物や溝、壺棺や方形周溝墓などが検出されている。また北東１㎞には、４本の空濠で囲まれた弥生時代後期の高地性集落である橘谷Ⅰ～Ⅲ遺跡があり、近接地から銅鐸が出土している。そのほか古墳時代では、高井遺跡において前期及び中期の竪穴住居が検出されている。さらに奈良時代では、東１㎞に紀伊国府跡と推定されている府中遺跡があり、また西１㎞には創建期の複弁八葉蓮花文軒丸瓦が出土した直川廃寺跡が知られている。

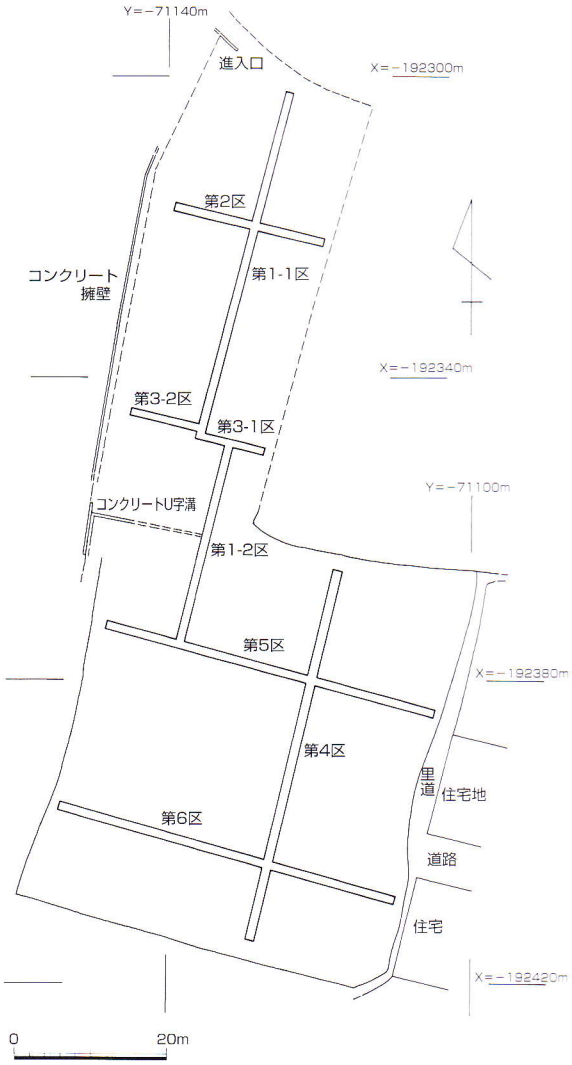


調査位置図

調査の内容

調査は、対象範囲に幅約１ｍのトレンチを合計６本設定し行った。調査面積は249㎡である。

調査対象地の現況は荒蕪地であり、調査地全体には現表土として造成土が堆積している。今回の調査地は、現地表面の標高が25.00ｍ～26.00ｍを測る丘陵頂部西側傾斜地に位置する。そのため、調査地北端部に位置する第１－１区北端部よりも第４区北端部から第５区東端部周辺が最も高所となり、その北西側及び南側、西側へ向かって低く傾斜することとなる。また重機掘削を行った結果、造成以前の旧地形を示すものとして、第４区の西側において約１ｍの高低差で西側に落ち込む地形変換線を検出した。また第５区北壁面の土層観察では、この落ち込みの斜面に沿って構築された石垣を確認した。よって第４区周辺以東には西端を石垣によって区画した一段高い土地が存在し、第４区周辺以西は一段低い土地であったと考えられる。また丘陵西端部の状況としては、第２・３－２・５・６区西半部において緩やかに傾斜した後、西端部は崖状に落ち込むものである。



調査地区割図

以上の旧地形を踏まえた調査地の基本層序は、第４区以東の層序として現表土には厚さ15～20㎝を測る造成土が堆積している。この造成土を除去した下位層が現代の耕作土と考えられる暗灰黄色細砂混シルト（第１層）である。また第２層以下は、前述した高低差のある旧地形を水平に整地するために持ち込まれた造成土が堆積している。これらの堆積土を除去した下面が、遺構検出面である第７層及び第７'層上面である。

次に第４区以西の層序は、現表土として厚さ約70㎝を測る造成土が堆積しており、この造成土を除去した下位層が現代の耕作土（第１層）である。第２層以下には、第３層との間層として旧地形による高低差をなくすために持ち込まれた造成土が堆積し、第３層以下が遺物包含層となる。第３層は黄褐色粗砂混シルトであり、また第４層はにぶい黄褐色粗砂混シルトである。第４層からは土師器の他、瓦器が出土しており鎌倉時代以降の遺物包含層と考えられる。第５・５'層は、第２区の西端おいて確認したものである。そのうち第５層は灰黄褐色細砂混シルトであり、古代の須恵器杯身や瓦器が出土することから平安時代から鎌倉時代にかけての遺物包含層と考えられる。また第５'層は、黄褐色細砂混シルトであり第５層と第７層との混和層である。さらに第６層は厚さ20㎝前後を測る黒褐色粗砂混シルトであり、第１－１区南側中央部において確認した古墳時代前期の遺物包含層である。これらの堆積土を除去した下面が遺構検出面である第７層（明黄褐色粗砂混シルト）及び第７'層（明黄褐色細砂混シルト）上面である。これらの各堆積土については、遺物を含まない

ことから自然堆積層と判断した。

調査では、各調査区の第７層及び第７'層上面において弥生時代後期のものと考えられる竪穴住居１棟や溝１条、古墳時代前期の竪穴住居４棟及び竪穴状遺構１棟、溝16条及び土坑７基の他、ピット134基を検出した。

第１－１区では、主に調査区の南半部において溝15・16の他、ピットなどを検出した。また調査区中央部では、古墳時代前期の遺物包含層と考えられる第６層を確認し、東壁際においてサブトレンチを設定し掘削を行った。遺構検出面の標高は24.60～25.10mを測り、北から南に向かって低くなる。第１－２区では、調査区の北端部、第３区との接合部分において古墳時代前期の隅丸方形を呈する竪穴住居６を検出した。また調査区中央部では溝12･13及びピット110･111などを検出した。遺構検出面の標高は、24.90～25.10m前後を測る。

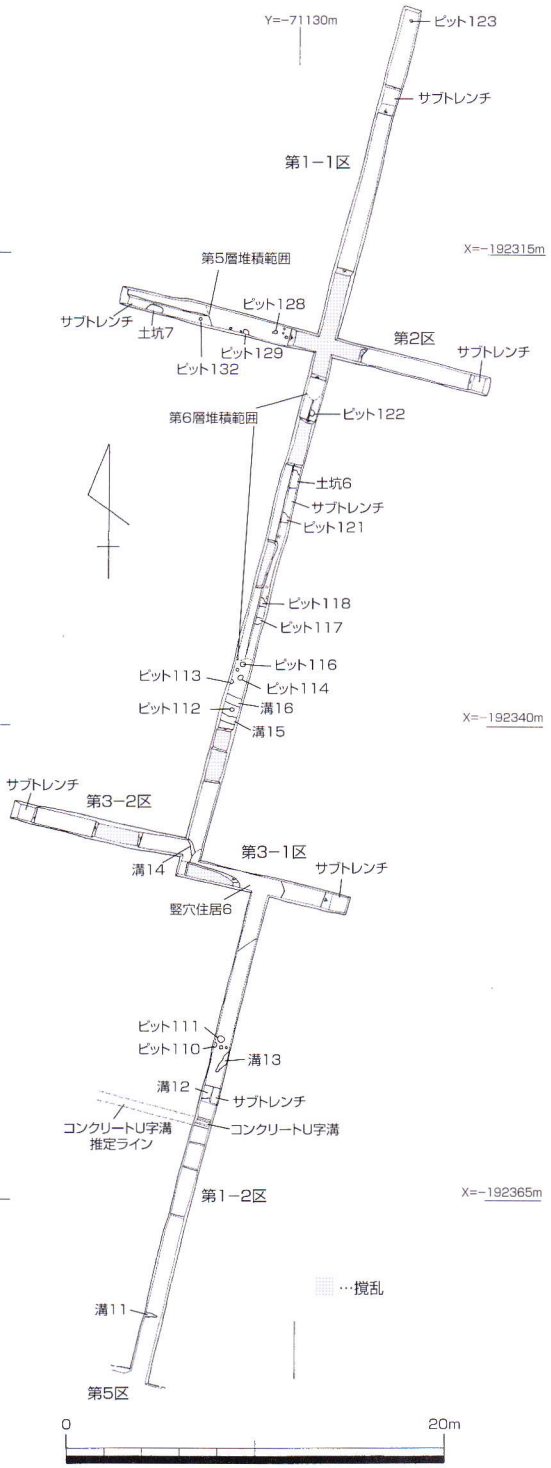
第２区では、主に調査区の西半部において土坑７の他、ピット128・129・132を検出した。遺構検出面の標高は、24.40～25.20mを測る。

第３－１区では、第１－２区との重複部分で竪穴住居６の北西隅部から北へ延びる溝14を確認した。遺構検出面の標高は、24.60～25.10mを測る。

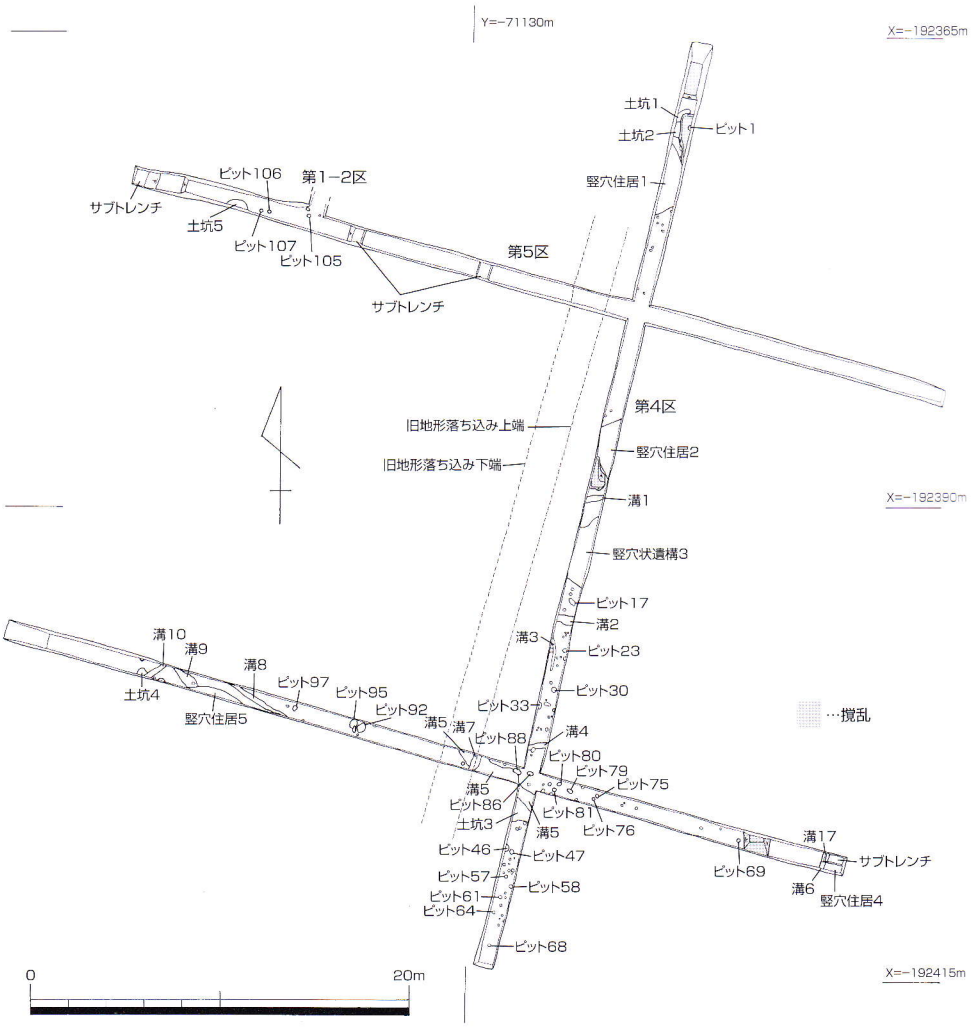
第４区では、主に調査区北半部で古墳時代前期の方形を呈する竪穴住居１・２を検出した他、焼土や炭が底面に堆積する土坑１などを確認した。また南半部では古墳時代前期の竪穴状遺構３を検出した他、溝１～５及びピットを多数確認した。遺構検出面の標高は、25.00m～25.80mを測る。

第５区では、調査区の西端部において土坑５の他、ピット105～107を検出した。調査区東側は、今回の調査対象地内では最も高所に位置するため第７層上部が削平を受けており、遺構を確認することができなかった。遺構検出面の標高は、23.80m～25.80mを測る。

第６区では、調査区の西端部において弥生時代の円形を呈する竪穴住居５を検出した。また遺構の重複関係から、この住居に先行する時期のものとして溝９を確認した。その他、調査区の東端部において古墳時代前期のものとみられる竪穴住居４を検出し、調査区全体では溝５・７・８・10や土坑４及びピットを多数確認した。遺構検出面の



第１・２・３区 遺構全体平面図



第４・５・６区 遺構全体平面図

標高は、24.00～25.80mを測る。

今回の調査で出土した遺物には、弥生土器、土師器、須恵器、瓦器、中世土師器、国産陶磁器、石製品があり、その出土量は遺物収納コンテナに４箱を数える。また遺物の大半は、摩滅が著しく調整等不明瞭な古墳時代前期の土師器である。

まとめ

調査では、調査対象地の全域において、弥生時代後期から古墳時代前期にかけての遺構を確認した。これらの遺構群は、第１・２次調査によって確認された弥生時代後期から古墳時代前期にかけての集落がさらに西及び北側に広がることを示すものである。また遺構の分布傾向としては、調査地全域において竪穴住居など居住を示す遺構が認められるものの、第４区周辺が特に集中する部分としてあげられる。これについては第４区周辺が丘陵頂部周辺であること、また前述した段々状地形を成形する目的で第４区以西の第７層上面が削平を受けた結果と考えられる。調査地周辺は、小高い丘陵上であり集落を形成する好適地である。当遺跡の東に立地する府中遺跡は国府跡と想定されており、今後、奈良時代以降の集落が確認される可能性も考えられる。（藤藪勝則）

【参考文献】（財）和歌山市文化体育振興事業団 『府中Ⅳ遺跡第２次発掘調査概報』 1996

10. 史跡和歌山城 第30次調査

調 査 地　和歌山市一番丁３番地及び県道和歌山停車場線敷内

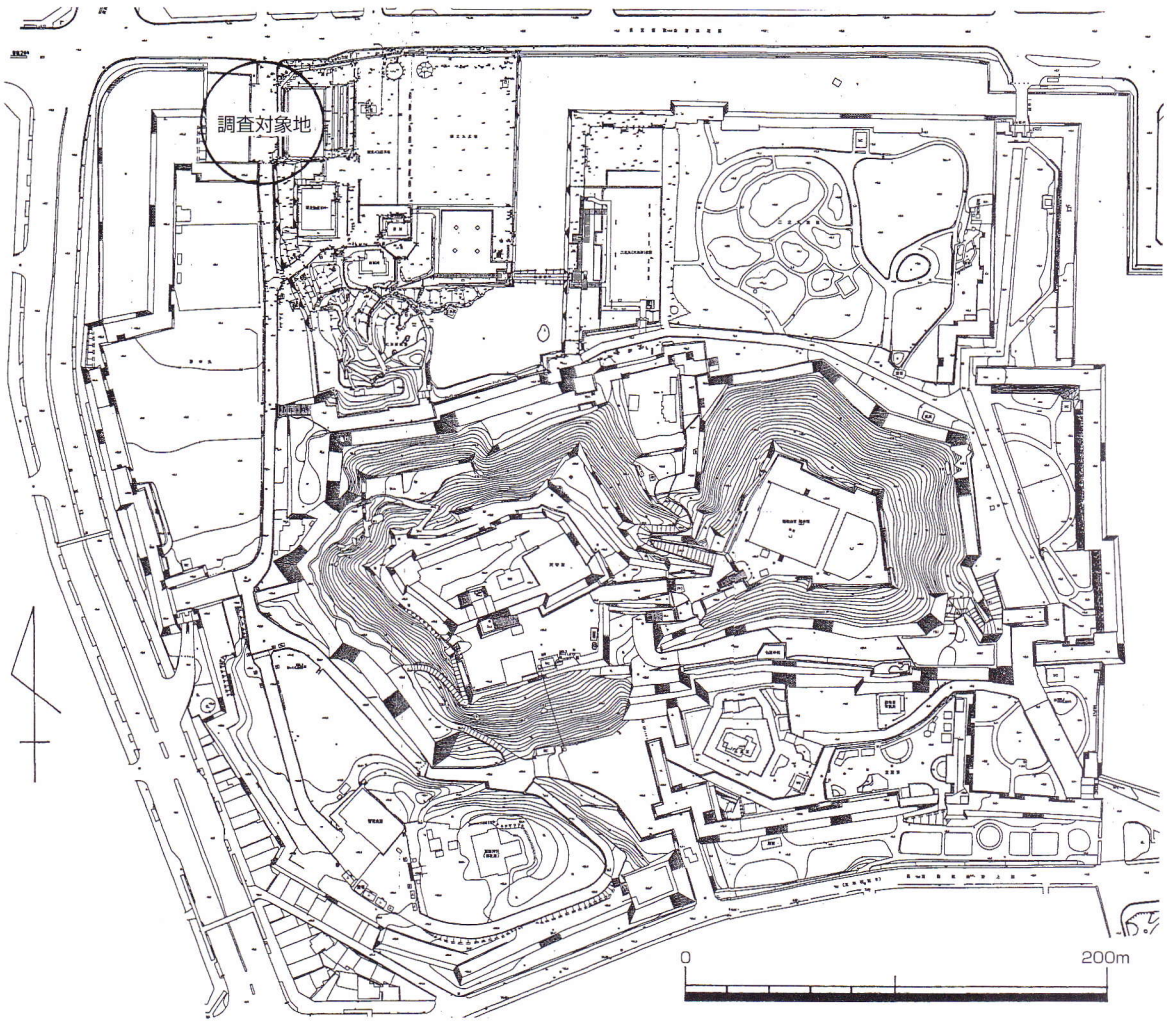
調査面積　233㎡

位置と環境

和歌山城は紀ノ川下流域南岸の平野部に位置する独立丘陵、岡山に築かれた平山城である。和歌山城に関する調査はこれまで29次を数え、数多くの遺構・遺物を検出している。中でも、平成13・14年度の地方拠点史跡等総合整備事業並びに平成15～17年度の史跡等総合整備活用推進事業、平成18年度の史跡等・登録記念物保存整備事業として実施した「史跡和歌山城御橋廊下復元及び二之丸西部・西之丸第一期整備」（第25～29次調査）では御橋廊下の復元整備に必要な成果を得た。

今回の調査は、史跡和歌山城の北西隅部にあたる西堀周辺部及び御勘定御門南東側の御勘定門角御櫓周辺の整備に伴う事前調査として計画されたもので、和歌山城管理事務所から財団法人和歌山市都市整備公社が依頼を受け、和歌山市教育委員会文化振興課の指導のもとで実施したものである（調査位置図）。

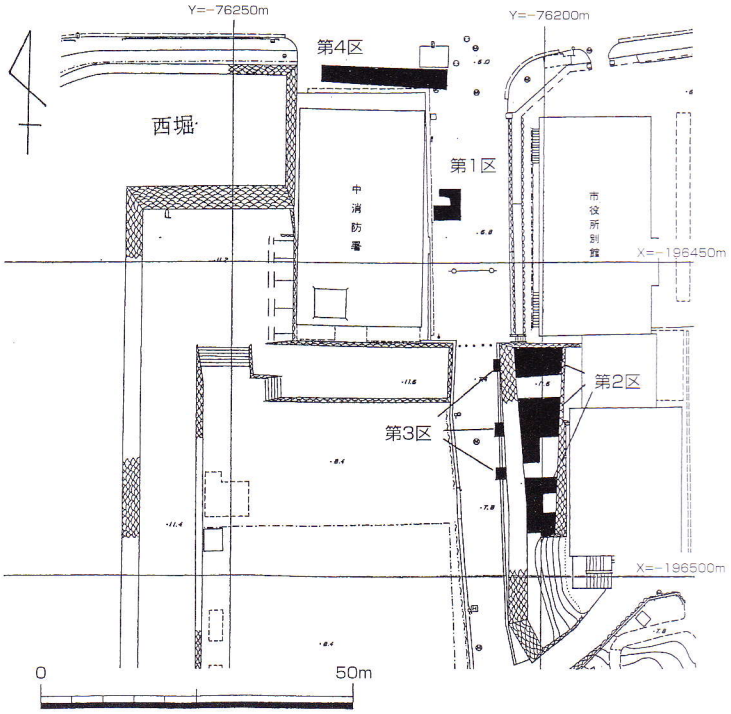
現地における調査は、平成19年12月10日から同20年３月11日までの期間で実施した。



調査位置図

調査内容

今回の調査は、中消防署移転撤去に伴い吹上御門址の整備に関係する調査区（第１・４区）と御勘定門東側の石垣整備に伴う調査区（第２・３区）の２地区を設定した（調査地区割図）。なお、第２・３区については更に小区を設定し、それぞれ北から－１、－２、－３と地区名に枝番を付けて呼称した。



調査地区割図

第１区では、西堀南側の石垣を検出した（写真１）。石垣は、奥行き1.0ｍ程度の砂岩を使用し、打ち込みハギの布積みであり、東西長4.2m、堀底に向けた高さ1.4m分を検出した。この石垣の傾斜角度は約67°で、石材には幅10㎝程度の矢穴を確認した。裏込めには、直径30㎝以下の砂岩円礫を用いている。また堀内部の土層堆積状況は、北から南に向け下降する粗砂層を主体に５単位以上を確認した。

第２区は御勘定門東側櫓台上面の調査で、『和歌山御城内惣御絵図』に「御勘定御門上角御櫓」と記されている場所にあたり、櫓台の北側で礎石建物１棟と、その建物南側に接続する土塀を検出した（写真２～６）。

礎石建物は櫓台石垣の北面と西面に沿った状況に建てられており、南北約14.3m、東西5.4mの規模を測る南北方向に長い建物である（写真４）。礎石は南辺と東辺にみられ、直径40～50㎝の平坦な砂岩円礫（自然石）を用いたもので、礎石間を結晶片岩の割石を用いた石列で繋いだ構造になって

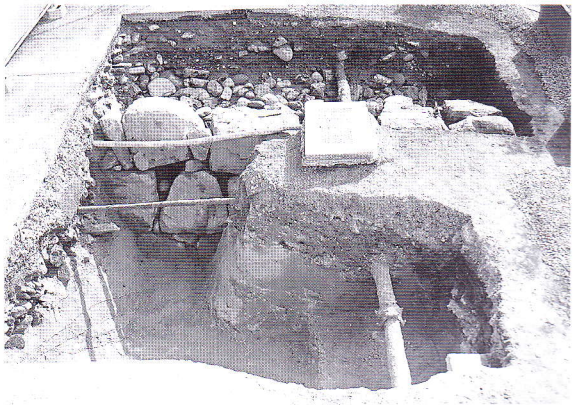


写真１　第１区　全景（北から）

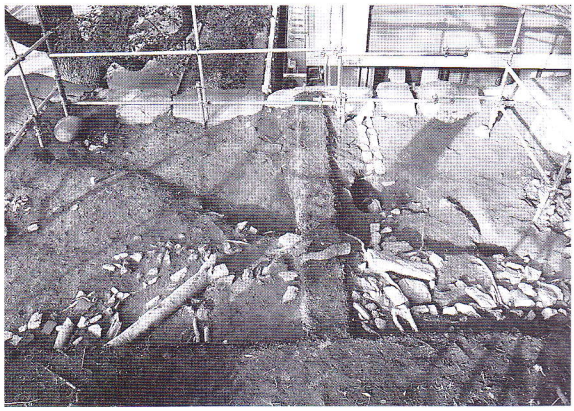


写真２　第２－１区　全景（南から）

写真３　第２－２区　全景（南から）

いる。結晶片岩の石列は西辺の一部にも残存しており、北辺にはみられないが本来は北辺にも結晶片岩石列は存在したものと考えられる。建物は礎石の配置から桁行き七間、梁行き四間の側柱建物を復元することができ、礎石芯々間の距離は桁行き方向が約２ｍを測ることから、一間＝六尺五寸（1.97m）の京間を使用したとみられ、和歌山城下町で徳川期に用いられた用尺が使用された建物であるといえる。また、梁行きの礎石間は４尺を用いたものと考えられる。

土塀は、礎石建物南西角に接続するものであり、櫓台石垣の西面に沿って築かれており、基礎石組上に土で構築したものである（写真５）。２－２区で延長4.3m、２－３区では延長8.4m分を調査したが、櫓台石垣西面に沿って南端まで築かれている。土塀の基礎石組は結晶片岩の割石を１～２段に組み合わせたもので、幅約80㎝、高さ約20㎝の規模を測る。その上部の土壁部分は、基底幅約70㎝、最大残存高約60㎝の規模を測る。土壁の土色・土質は2.5Y５／４（黄褐）シルトであり、細かく分層はできないことから一体成形で積み上げられたものと考えられ、中には瓦片が少量含まれていた。なお、土塀の崩落土から大量の桟瓦が出土しており（写真６）、土塀は桟瓦を用いていたものと考えられる。少量であるが漆喰も出土しており、現状ではみられないが、土壁面に漆喰を施していた可能性がある。また、土塀基礎石組が礎石建物の石列と組み合っていることから、これらの建造物は徳川期の同一時期に構築されたものと推定することができる。

第３区は石垣裾部に設けた３ヵ所の調査区である。既存石垣の裾部に石垣と平行して構築された石組溝を検出した他（写真７～９）、３－２区では、石組溝の途中に設けられた石組集水枡を確認した（写真８）。

第４区では、西堀北面石垣と吹上橋の橋台石垣を検出した（写真10）。これらの石垣は、第１区で

写真４　第２－２区　礎石建物（北から）

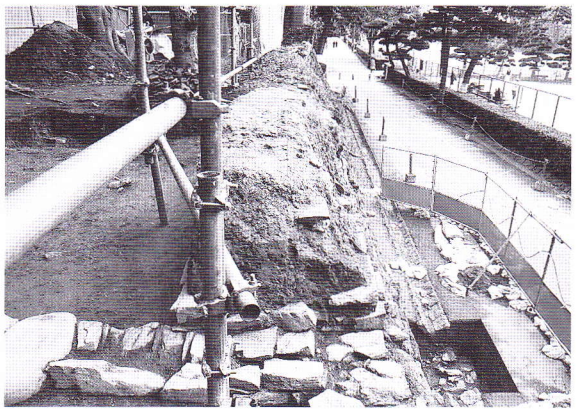


写真５　第２－２区　土塀（北から）

写真６　第２－２区　土塀崩落土・瓦出土状況（東から）

写真７　第３－１区　全景（西から）

検出した南面石垣と同様の積み方をしたもので、深さ約1.4m分を確認した。また石垣の接合部が組み合わさって積まれていることから、これらの石垣は同時に構築されたものと考えられる（写真11）。

今回の調査で出土した遺物は、コンテナ約60箱である。江戸時代以前の遺物は、須恵器、瓦器、中世土師器、平瓦、丸瓦が数点ずつ少量出土しており、他は江戸時代の遺物が主体を占める。

江戸時代では、近世土師器、瀬戸・美濃系陶磁器、肥前系陶磁器、堺焼などの土器類が少量出土した他、平瓦・丸瓦・滴水瓦・桟瓦・鬼瓦・鯱瓦・軒隅瓦・面戸瓦・輪違瓦・塼瓦などの瓦類が大量に出土した。また、土人形などの土製品、碁石・面子などの石製品、鉄製鎹・角釘・刀子などの金属製品が出土している。明治時代以降のものでは、陶磁器類、銅銭、ガラス瓶・面子などが少量出土した。

特に、浅野家家紋「違鷹羽紋」の瓦当文様滴水瓦が第２区で10点以上出土しており、このタイプのものが最も集中して出土した調査地であるといえる。

まとめ

以上、各調査区において石垣を中心とした良好な遺構を多数検出した。特に、西堀周辺の調査区（第１・４区）では西堀を構成していた石垣と吹上橋の北側橋台部を検出し、『和歌山御城内惣御絵図』と符合する成果を得た。また御勘定門東御櫓及び石垣基底部確認の調査区（第２・３区）では櫓台上部に存在した礎石建物と土塀を確認した他、石垣裾部に構築された石組溝及び石組集水枡を検出し、徳川期の櫓台に付随する構造物を明らかにすることができた。　　（北野隆亮）

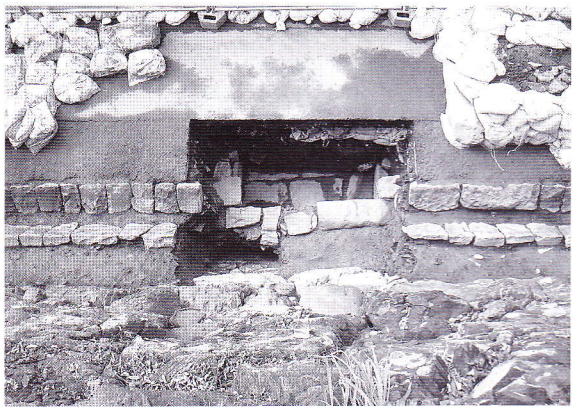


写真８　第３－２区　全景（右が北）

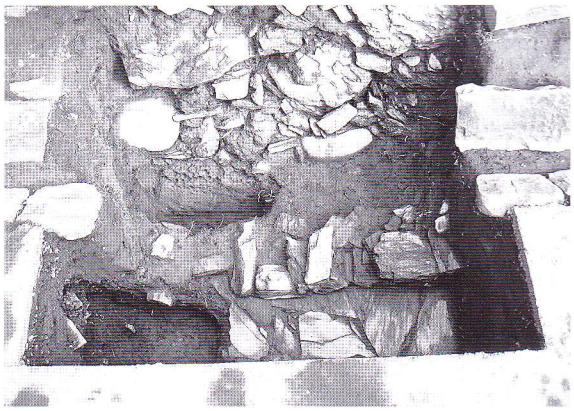


写真９　第３－３区　全景（西から）

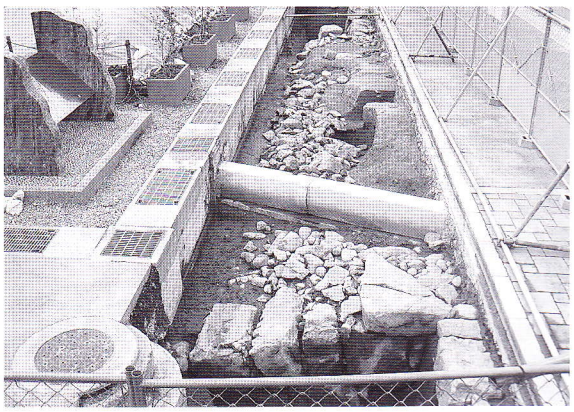


写真10　第４区　全景（東から）

写真11　第４区　石垣接合部（南東から）

11. 府中Ⅳ遺跡 第４次発掘調査

調 査 地　和歌山市府中字長通り315番６、318番、322番、323番

調査面積　282.10㎡

位置と環境

府中Ⅳ遺跡第３次確認調査参照。

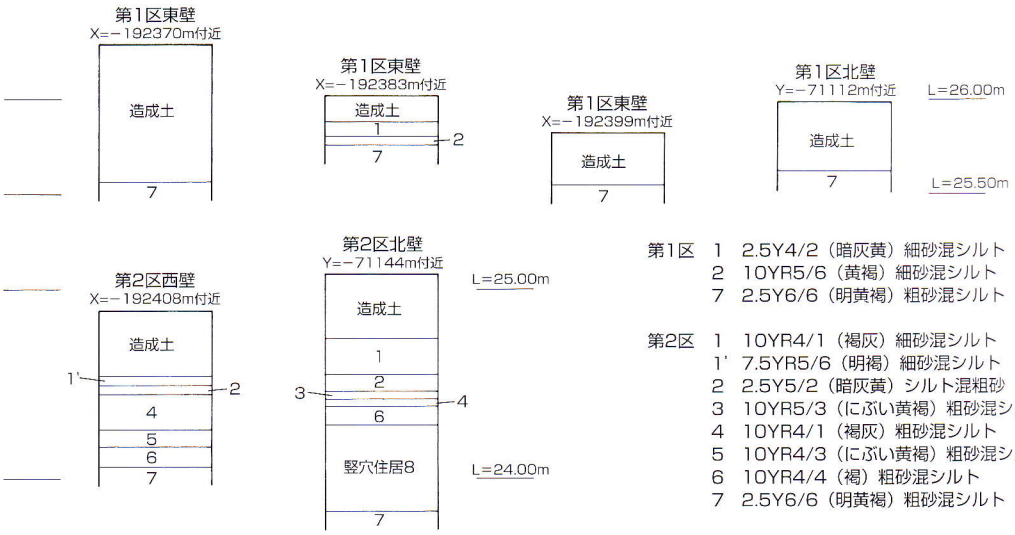
調査内容

第４次調査は、第３次確認調査において弥生時代後期から古墳時代前期にかけての竪穴住居や溝及びピット、鎌倉時代のピットなど多数の遺構を確認し、第１～２次調査において検出した当該期の集落範囲がさらに本調査地にまで広がることが明らかとなったため、深掘り及び住宅内道路敷設が計画されている部分を対象として本発掘調査を実施したものである。調査は、第３次確認調査第４区の大半を含むＬ字状の調査区を第１区（面積214.50㎡）とし、第３次確認調査第６区の南側に第２区（面積61.77㎡）、また第１区の東側に隣接して第３区（面積5.83㎡）を設定し行った。遺構番号については、煩雑さを避けるため、第３次確認調査において付した番号に連続して付すこととした。

調査地の基本層序としては第３次確認調査成果から、第１・３区では現在及び近代の造成土を除去した下面が遺構検出面（第７層上面）であり、第１区の北側において部分的ではあるものの、耕作土（第１層）及び旧耕作土（第２層）の堆積を確認した。

第２区の基本層序は、調査区が第３次確認調査において確認した一段低い土地に位置するため第１・３区とは様相が異なる。まず現表土としては、厚さ約40㎝を測る造成土が堆積している。この造成土を除去した下位層が現代の耕作土と考えられる褐灰色細砂混シルト（第１層）である。また第１層下には明黄褐細砂混シルトである第１'層を確認した。この第１'層は部分的に認められるものである。また第２層は暗灰黄色シルト混粗砂である。第３次確認調査及び今回の調査においてもこれら第１'・２層下において造成土を確認したことから、第１～２層は近代以降の耕作にかかわる堆積土であると考えられる。第３層は、最大10㎝の厚さを測るにぶい黄褐色粗砂混シルトであり、第４層は厚さ19㎝を測る褐灰色粗砂混シルトである。また第５層は調査区西壁において確認したもので厚さ最大13㎝を測るにぶい黄

調査地区割図



調査地土層柱状模式図

褐色粗砂混シルトである。さらに第６層は厚さ最大17㎝を測る褐色粗砂混シルトである。これらのうち第４～６層は、すべて第２区西半部に堆積するもので、調査区北及び西壁土層堆積状況の観察ではすべて南西に向かって厚く堆積する。また各堆積土の時期については、第４層から土師器片が出土しており、第６層からは土師器及び須恵器が出土したことから、第６層は古墳時代以降のものと考えられるものの、その他の各堆積土については遺物が出土していいないため詳細は不明である。

最後に第７層は明黄褐色粗砂混シルトであり、この上面が遺構検出面である。この第７層には遺物を含まないことから自然堆積層と判断した。第３次確認調査では、第７層上面において弥生時代後期の竪穴住居１棟や溝１条、古墳時代前期の竪穴住居４棟及び竪穴状遺構１棟、溝16条及び土坑７基の他、ピット134基を検出した。これらの遺構については、今回の調査区と重複する第４～６区で検出したものについて調査を行った。その結果、一部の遺構については、その性格等変更を要するものも存在することから今回の調査結果をもって修正する。

以下、主な遺構について調査区ごとに説明する。なお便宜上、第１・３区の遺構はまとめて説明する。

［第１・３区検出の遺構］

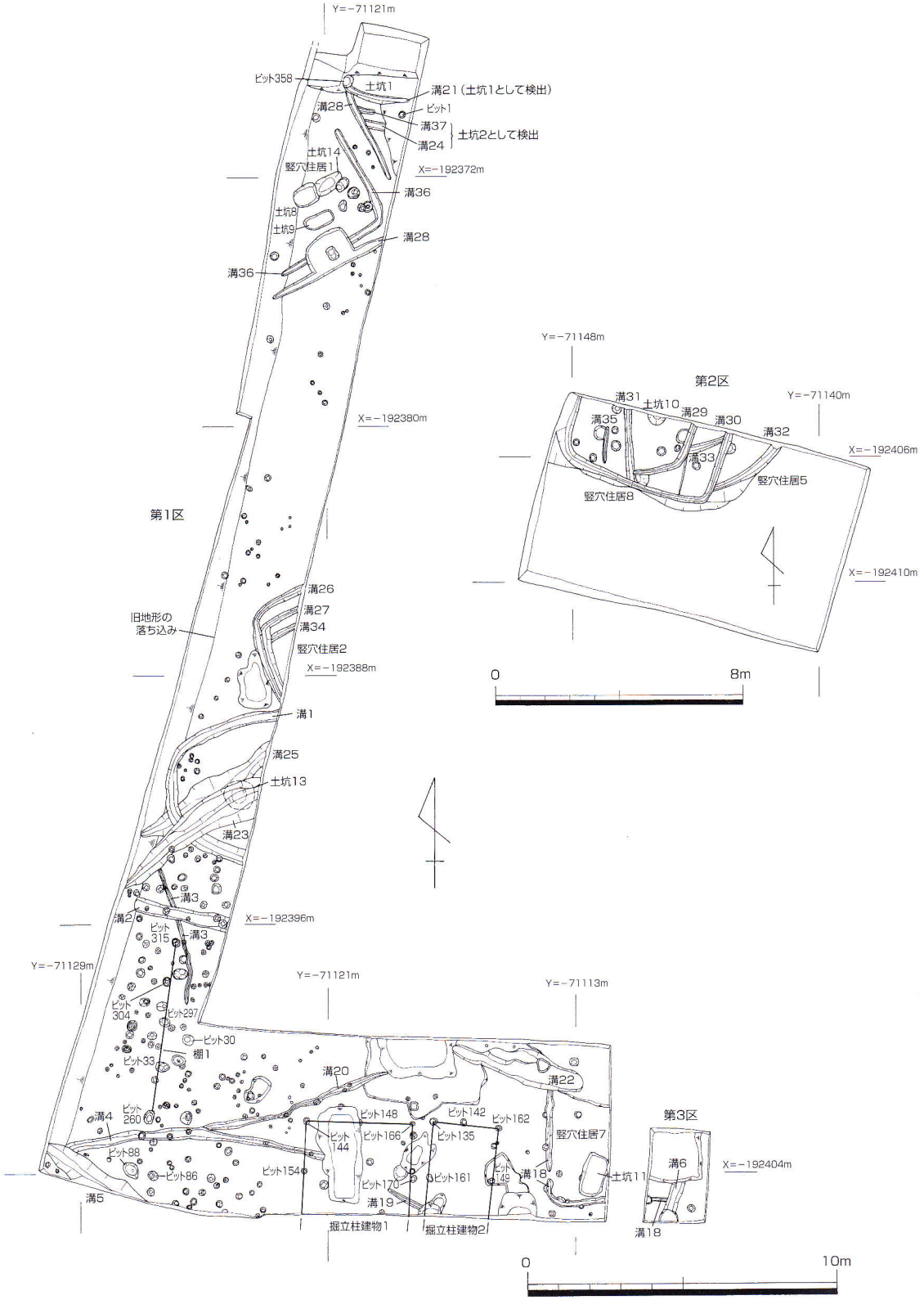
第１・３区では、弥生時代後期の溝25、弥生時代後期末から古墳時代初頭にかけての溝１や土坑13、古墳時代初頭の竪穴住居７・１・２、溝５・２・４・19・20、土坑２・11、古墳時代前期の溝23、土坑１、また古墳時代のものと考えられる掘立柱建物１・２、柵１の他、鎌倉時代のピットなどを検出した。遺構検出面の標高は調査区の南北方向では25.30～25.80mを測り、北から南に向かって低くなり、また東西方向では、25.30～25.70mを測り西に向かって低くなる。

溝25は、第１区南北トレンチの中央部南側で検出したもので、検出長5.2m、深さ約30㎝を測る。遺構底面の標高は、北端部が25.34m、南端部が25.13mを測り北東から南西に向かって低くなる。またその方向性は、N－57°－Eである。遺構覆土は２単位に分層ができ、第１層が灰黄褐色粗砂混シルトであり、第２層が黒褐色粗砂混シルトである。この溝の埋没時期は、出土遺物から弥生時代後期と考えられる。

溝１は、溝25が埋没した後に掘削された弧状にめぐる溝であり、その東側が調査区外へと続くため遺構全体の形状は明らかにできなかったものの、竪穴住居の壁溝になる可能性がある。この溝の

規模は、幅24～55cmを測り、深さは約20cmを測る。遺構覆土は第１層が褐灰色粗砂混シルトであり、第２層が黒褐色粗砂混シルトである。埋没時期は、出土遺物から弥生時代後期末から古墳時代初頭にかけてとみられる。

土坑13は、溝23の遺構底面において検出したもので、直径1.0～0.9m、検出面からの深さは約35cm



第１・２・３区　遺構全体平面図

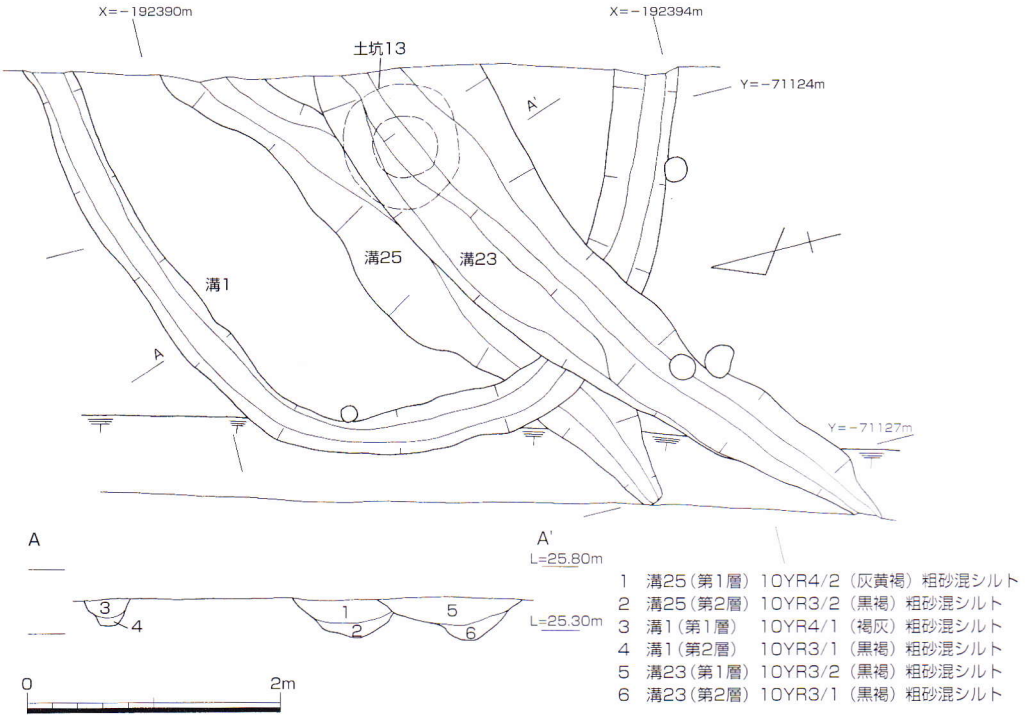
を測る。遺構覆土は単一の黒褐色粗砂混シルトである。時期は出土遺物から溝１と同時期のものと考えられる。

第１区南北トレンチの北端部において検出した土坑２は、第３次確認調査において土坑として認識したものの、薄い覆土を掘削した結果、２条の平行する溝24・37を確認した。これらの遺構から、土坑２は少なくとも２回以上の建て替えが行われた竪穴住居と考えられる。時期は、竪穴住居１との重複関係から古墳時代初頭のとみられ、庄内式併行期の古段階のものと考えられる。

竪穴住居７は、第１区東西トレンチの東端部及び第３区にかけて検出した方形の平面プランをもつ竪穴住居である。この住居に関係するとみられる遺構としては、まず壁溝である溝18及び、溝18の外側に接して1.0～1.3mの間隔で検出したピット157・158・207・352や、主柱穴と考えられるピット136・137・208の他、ピット138・156・353がある。これらの遺構は、竪穴住居７の遺構覆土が遺存していなかったため、すべて同一面上において検出したものである。

この住居の規模は、壁溝及び主柱穴との位置関係から一辺4.5m以上を測るものである。壁溝の外側にみられる直径15～20㎝を測るピット157・158・207・352は、ほぼ等間隔でみられることから、住居の壁体を支持するための杭穴と考えられる。また主柱穴については、直径20～30㎝、深さ約20㎝を測るもので、その間隔はピット208からピット137が2.0m、ピット137からピット136が1.7mを測る。時期は、主柱穴などの出土遺物から古墳時代初頭とみられ、庄内式併行期の中段階のものと考えられる。

竪穴住居１は、第１区南北トレンチの北端部において検出した方形の平面プランをもつ竪穴住居である。この住居は、住居西側が現代の地形改変のため削平を受けているものの、新旧２時期の住居が重複してみられるもので、古段階のものを竪穴住居１aとし、新段階のものを竪穴住居１bとして説明する。まず竪穴住居１bに関係するとみられる遺構としては、壁溝である溝28や、住居の入口部分にあたるピット351及び土坑９、主柱穴とみられるピット245・328・327の他、ピット246・329～334・359などがある。また、竪穴住居１aに関係するとみられる遺構としては、壁溝である溝



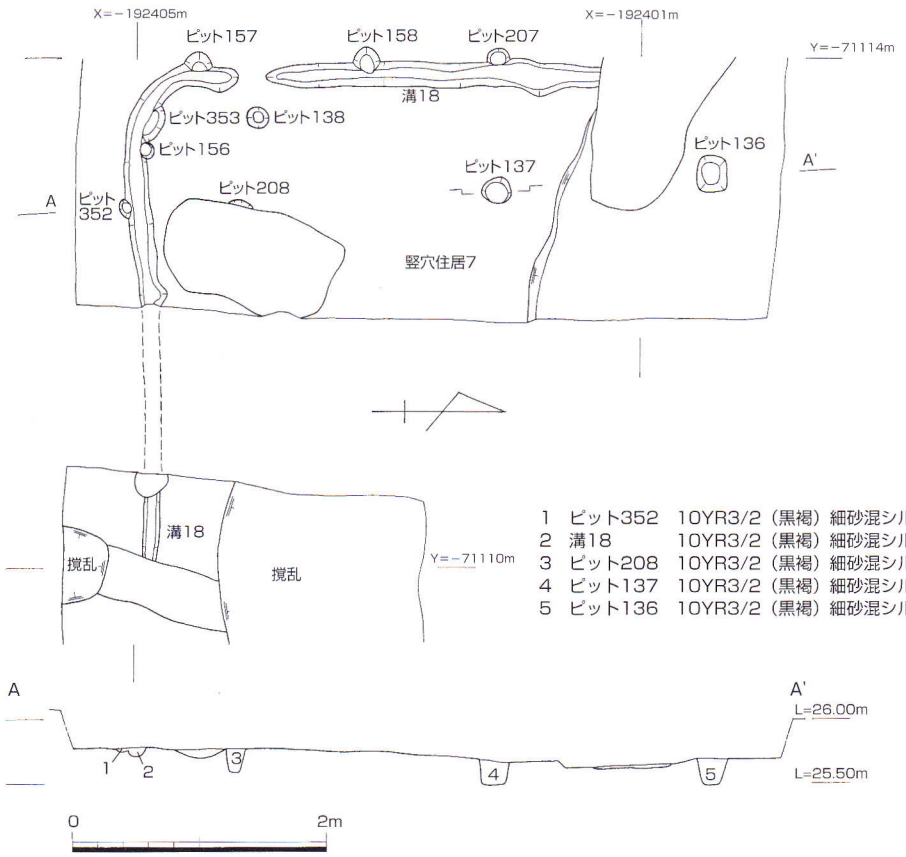
溝25・1・23、土坑13 遺構平面図及び土層断面図

36や炉と考えられる土坑８及びその東側に接するように検出した土坑14がある。住居の規模は、壁溝の検出範囲から竪穴住居１aが一辺約4.0m以上、竪穴住居１bが一辺約5.0m以上を測る。以下、便宜上竪穴住居１bから説明する。

竪穴住居１bについては、南面する壁溝の中央部北肩が住居の内側に屈曲し方形に拡張されている状況（土坑12）から、この部分が住居への入口部分とみられ、その中心部においてピット351を検出した。このピット351やその北側において検出した土坑９については、入口部分に設置された階段などを支持するための杭穴等と考えられる。また主柱穴は、直径約25㎝、深さはピット328が14㎝、ピット245が20㎝、ピット327が27㎝を測るものである。この主柱穴の掘削深の差は、この住居が東から西に低く傾斜する傾斜地に構築されているため、地形的に低いピット245・327などが比較的深く掘削されたためと考えられる。また住居床面の状況は、古段階の竪穴住居１aが廃棄される段階で、厚さ最大８㎝を測る貼床（第10層）が施されており、その範囲は竪穴住居１aの壁溝（溝36）の内側である。

次に、竪穴住居１aについては、新段階の竪穴住居１bの貼床（第10層）を除去したところ、壁溝である溝36や炉とみられる土坑８の他、土坑14を検出した。土坑８は、長径80㎝、短径66㎝を測る楕円形を呈する土坑である。覆土は黒褐色粗砂混シルトであり、炭などは確認できなかったものの、壁溝などとの位置関係から炉と判断した。また、竪穴住居１aの主柱穴については、明確なものを確認できなかったことから、新段階の竪穴住居１bが構築される段階で竪穴住居１aの柱位置を踏襲した可能性が考えられる。

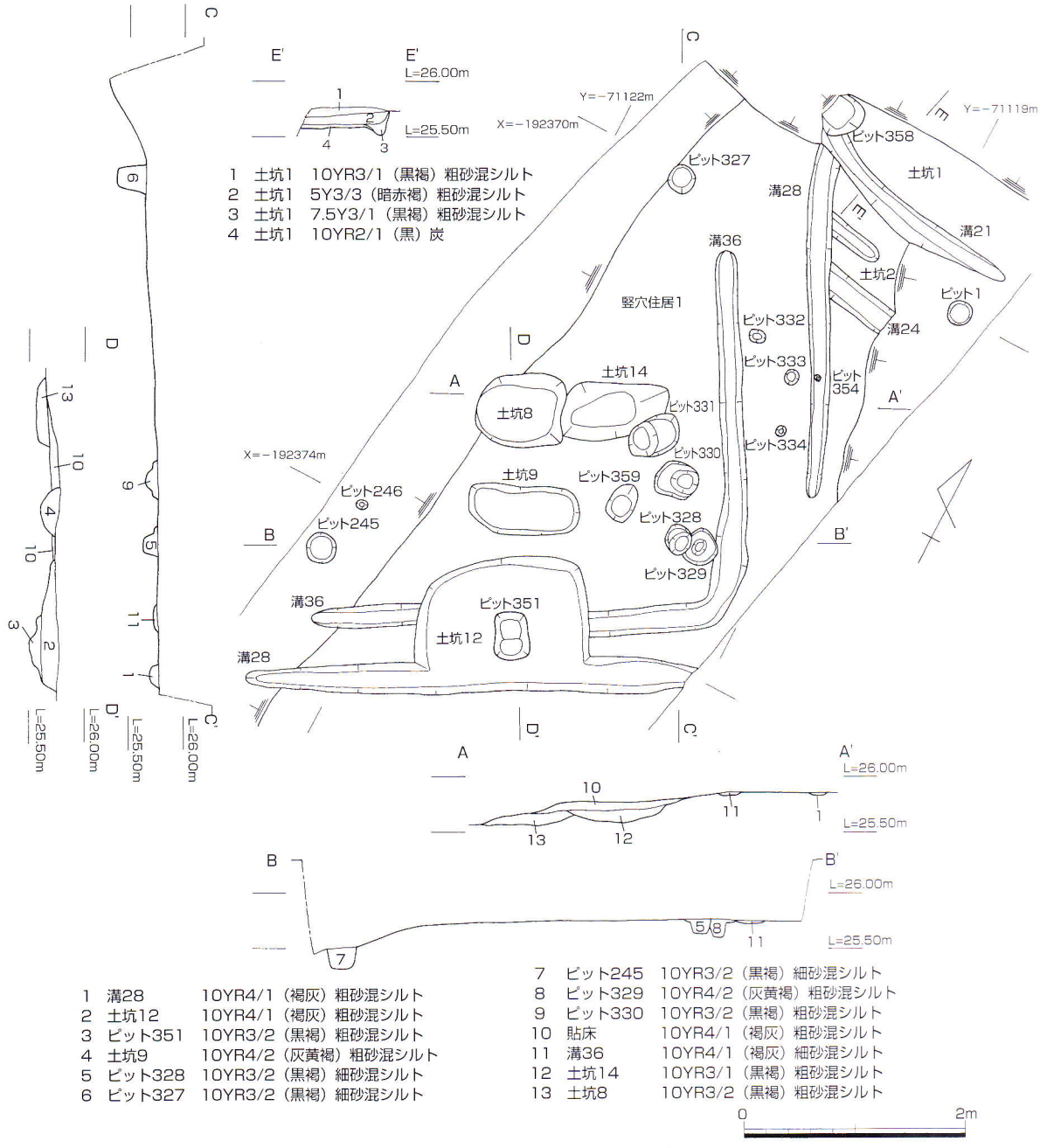
以上の遺構検出状況から、竪穴住居１a・bは拡張前の住居と拡張後の住居が重複して検出されたものと判断できる。時期については、出土遺物や遺構の重複関係から古墳時代初頭のものとみら



竪穴住居7　遺構平面図及び土層断面図

れ、庄内式併行期の新段階のものと考えられる。

竪穴住居２は、第１区南北トレンチの中央部において検出した方形の平面プランをもつ竪穴住居である。今回の調査範囲では住居北西隅部のみの検出であり、住居の中心部は調査区外に伸びるものである。この住居は、壁溝等の検出状況から３回の建て替えが行われているもので、古い時期のものから竪穴住居２a・２b・２cとし、土層堆積状況をもとにその構築過程について説明する。まず最も古い竪穴住居２aに伴う壁溝は溝34である。この住居が廃棄される段階で貼床（第５層）が施され、竪穴住居２bの壁溝である溝27が掘削されている。次に、竪穴住居２bが廃棄される段階で再度張床（第３層）が施され、竪穴住居２cの壁溝である溝26が掘削されている。このように、竪穴住居２は３時期にわたる建て替えを行った住居であり、長期にわたって同じ場所に住居を構築したことにその特徴がある。今回の調査では、これらの壁溝以外の遺構は確認できなかった。時期につい

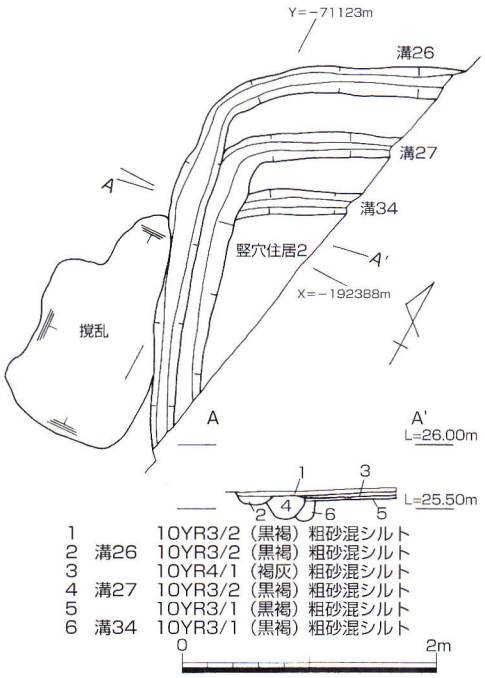


竪穴住居１、土坑２・１　遺構平面図及び土層断面図

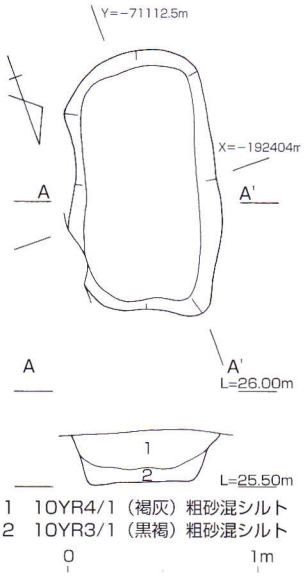
ては、出土遺物やその方向性から竪穴住居１と同時期の住居と考えられる。

溝23は、溝１及び土坑13が埋没した後に掘削された溝で、検出長5.7m以上、最大幅1.3m、深さ最大42㎝を測る。遺構底面の標高は、北端部が25.21m、南端部が25.13mを測り北東から南西に向かって低くなる。またその方向性は、北東から南西に向かってやや弧を描くものである。遺構覆土は２単位に分層ができ、第１層が黒褐色粗砂混シルトであり、第２層が黒褐色粗砂混シルトである。埋没時期については出土遺物から古墳時代前期とみられ、布留式併行期と考えられる。

第１区南北トレンチの北端部において検出した土坑１は、第３次確認調査において土坑と認識したものの、掘削の結果、遺構壁面に沿うように溝21を検出したことから竪穴住居と考えられるものである。この住居の平面プランについては、周囲を削平されているため詳細は不明である。また遺構覆土については、４単位に分層ができ、第１層が黒褐色粗砂混シルトであり、第２層が暗赤褐色粗砂混シルト、第３層が黒褐色粗砂混シルト、第４層が黒色炭層である。これらの遺構覆土の堆積状況や、遺構壁面及び底面において火を受けて赤色化した部分を確認したことから、この遺構の性格としては焼失住居の可能性がある。時期は、出土遺物や遺構の重複関係から古墳時代前期とみられ、布留式併行期と考えられる。



竪穴住居2　遺構平面図及び土層断面図



土坑11　遺構平面図及び土層断面図

土坑11は、第１区東西トレンチの東端部において検出した長さ約1.4m、幅約80㎝、深さ27㎝を測る隅丸方形の土坑であり、遺構底面が水平であることから土坑墓の可能性がある。遺構覆土は、２単位に分層が可能であり、第１層が褐灰色粗砂混シルト、第２層が黒褐色粗砂混シルトである。時期は、出土遺物や遺構の重複関係から古墳時代前期のものとみられ、布留式併行期のものと考えられる。

掘立柱建物１・２は、第１区東西トレンチの中央部において検出した掘立柱建物と考えられるもので、ともに梁行２間、桁行２間以上のものであり、その間尺は掘立柱建物１が約1.7m、掘立柱建物２が梁行1.0～1.1m、桁行1.8～1.9mを測る。これらの主軸の方向性はほぼ南北方向である。時期は、出土遺物がごく少量で細片であることから詳細には限定できないものの、古墳時代のものと考えられる。

柵１は、第１区の南西隅部において検出したもので、検出長6.6mを測る。この柵の方向性は、N－14°－Eであり、掘立柱建物１・２とほぼ同じ方向性を示す。時期は、出土遺物が少量であることから詳細には限定できないものの、その方向性から掘立柱建物と併存していた可能性がある。

［第２区検出の遺構］

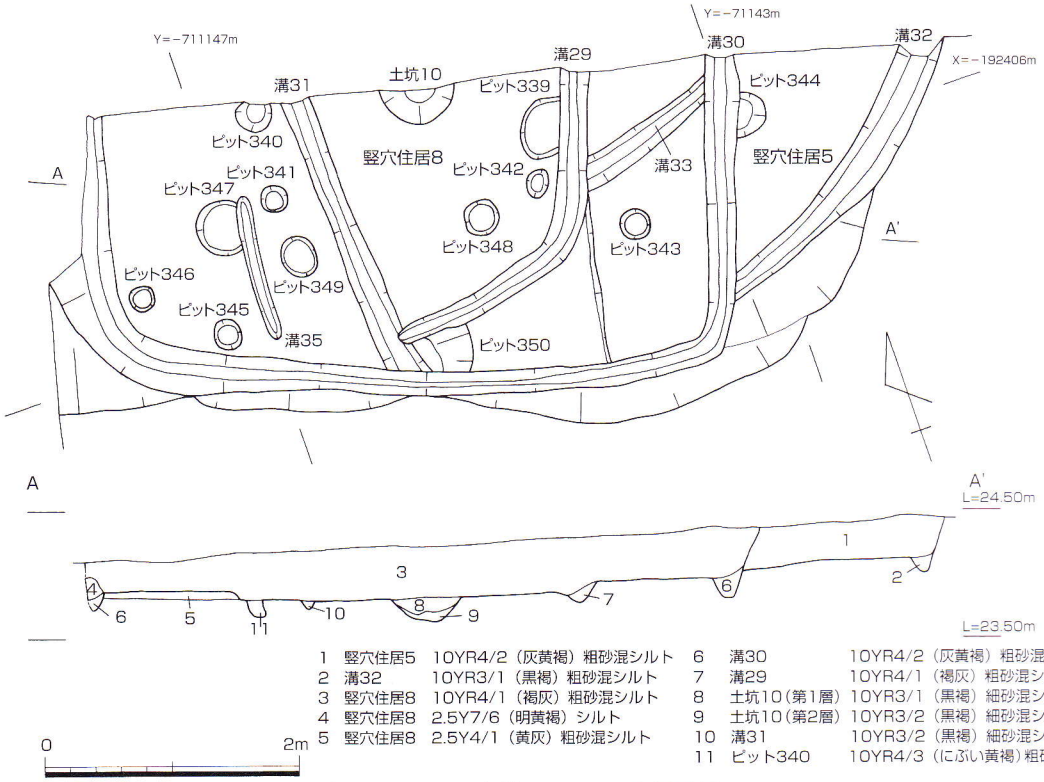
第２区では、弥生時代後期の竪穴住居５、古墳時代初頭の竪穴住居８を検出した。遺構検出面の

標高は、24.00～24.44mを測り、北東から南西に向かって低くなる。

竪穴住居５は、調査区の北半部において検出した円形の平面プランをもつ竪穴住居であり、その大半を後世に構築された竪穴住居８によって削平されているものである。この住居に伴う遺構としては、壁溝である溝32・33、また主柱穴と考えられるピット344・347の他、ピット339・350を検出した。壁溝については、２条検出したことから少なくとも２回の建て替えが行われていることが分かる。ただし、遺構覆土が厚さ34cmを測る灰黄褐色粗砂痕シルトの単一層であり、貼床等を確認できないことから、その前後関係については不明である。また主柱穴についは、壁溝との位置関係から溝32に伴うものとしてピット344・347が考えられる。この住居の規模については、第３次確認調査第６区西半部においてその北端部を確認しており、これを溝32の延長部分とすると直径約7.5mを測る住居を推定することができる。時期は出土遺物から弥生時代後期のものと考えられる。

竪穴住居８は、竪穴住居５が埋没した後に構築された方形の平面プランをもつ竪穴住居である。この住居に伴う遺構としては、壁溝である溝30や、掘削深から主柱穴と考えられるピット341・343及び炉と考えられる土坑10、また住居内部の区画溝もしくは排水溝とみられる溝29・31・35の他、ピット340・342・345・346・348・349を検出した。

この住居は、溝29と溝30との間が第７層を削り残すことによって周囲よりも一段高く成形されており、また調査区北壁面の観察では、溝35とピット340を結ぶライン以西に、厚さ４～７cmを測る黄灰色粗砂混シルト（第５層）が堆積することを確認した。これらのことから、この住居はその東西にベッド状遺構を伴うものと考えらえる。また、これらの段差をベッド状遺構とすると、溝29や溝35はベッド状遺構と床面との境を区画する区画溝となり、溝31については排水に関わる溝と考えることができる。その他、調査区北壁際において検出した土坑10は、直径約60cm、深さ約20cmを測るすり鉢状の土坑である。この土坑は、遺構覆土が２単位に分かれ、第１層が黒褐色細砂混シルトで



1	竪穴住居5	10YR4/2（灰黄褐）粗砂混シルト	6	溝30	10YR4/2（灰黄褐）粗砂混シルト
2	溝32	10YR3/1（黒褐）粗砂混シルト	7	溝29	10YR4/1（褐灰）粗砂混シルト
3	竪穴住居8	10YR4/1（褐灰）粗砂混シルト	8	土坑10（第1層）	10YR3/1（黒褐）細砂混シルト
4	竪穴住居8	2.5Y7/6（明黄褐）シルト	9	土坑10（第2層）	10YR3/2（黒褐）細砂混シルト
5	竪穴住居8	2.5Y4/1（黄灰）粗砂混シルト	10	溝31	10YR3/2（黒褐）細砂混シルト
			11	ピット340	10YR4/3（にぶい黄褐）粗砂混シルト

竪穴住居５・８　遺構平面図及び土層断面図

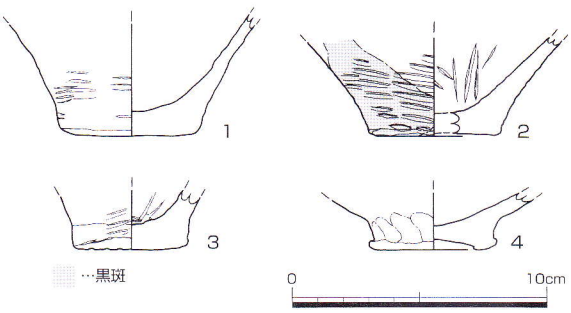
あり、第２層が同じく黒褐色細砂混シルトで焼土が混じるものであることから竪穴住居８の炉と考えられる。

時期は、出土遺物から古墳時代初頭のものとみられ、庄内式併行期の古段階と考えられる。

今回の調査では、各調査区の遺物包含層や遺構覆土から、弥生土器や土師器、須恵器、黒色土器、瓦器、中世土師器、国産陶磁器・瓦・土製品・石製品などが出土した。出土遺物の総数は、遺物収納コンテナに約６箱を数える。これらの遺物の大半は、古墳時代前期の土師器であり、器表面が剥落及び摩滅し、遺存状態は良好とは言えないものである。以下、主な遺構出土の遺物について古い時期のものから説明する。

［竪穴住居８出土土器］

１～３は弥生土器の甕である。これらはすべて底部の破片であり、底径は１が5.3㎝、２が5.2㎝、３が4.6㎝を測る。外面の調整には、すべてタタキが施されており、内面の調整は１が摩滅によって不明瞭ではあるものの、２・３には板状工具によるナデが施されている。また２の外面には黒斑がみとめられる。４は土師器の鉢または甕の底部である。底径は5.0㎝を測り、底部外面に指オサエの痕跡が明瞭に残るものである。



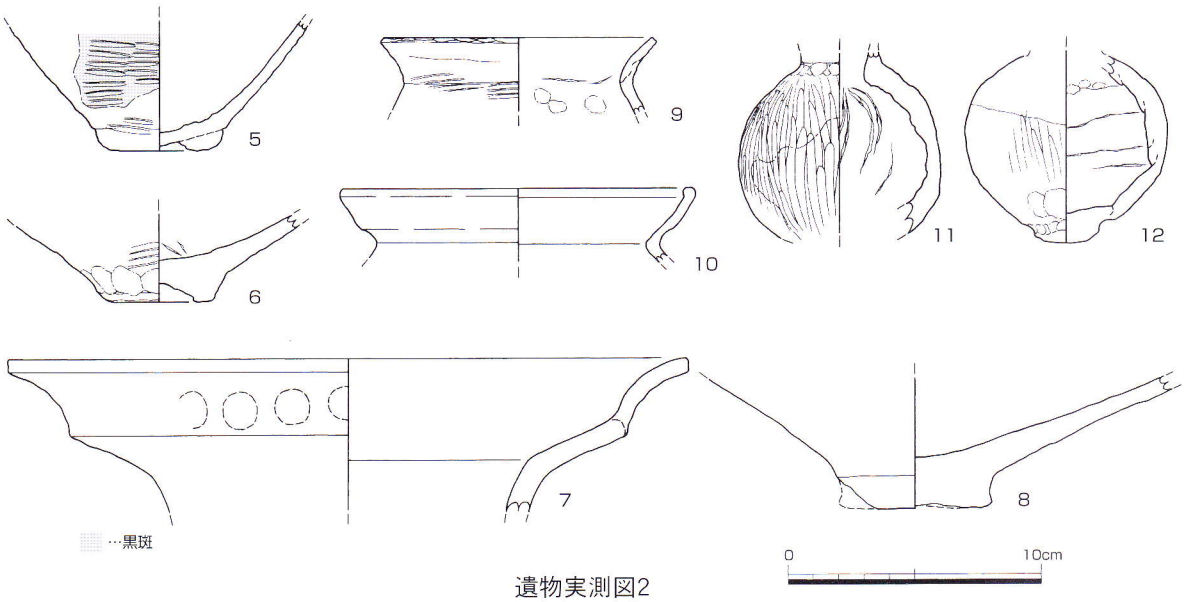
遺物実測図1

これらの遺物は第２区竪穴住居８から出土したもので、１～３は弥生時代後期のもので竪穴住居５に伴う遺物とみられ、４は古墳時代初頭のものと考えられる。

［溝25・１・５・23出土土器］

５は溝25から出土した弥生土器の甕である。底部は粘土紐を輪状に貼り付けるもので、底径は4.5㎝を測る。外面の調整にはタタキが施されており、内面の調整は摩滅のため不明瞭である。また外面には黒斑がみられる。時期については弥生時代後期のものと考えられる。

６は溝１から出土した土師器甕の底部であり、底径は4.3㎝を測る。外面の調整には体部下半にタタキが施されており、体部から底部にかけては指オサエがみとめられる。また内底面には工具痕が

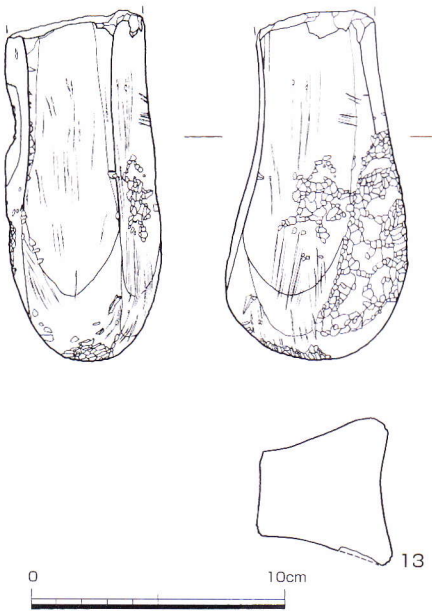


遺物実測図2

みられる。色調は明褐から黒灰色であり、黒斑がみられる。時期については、弥生時代後期末から古墳時代初頭のものと考えられる。７・８は溝５から出土した土師器壺である。７二重口縁壺であり、口径は26.9㎝を測る。口縁部の屈曲部外面には円形浮文が貼り付けられていた痕跡が残るもので、内外面の調整は摩滅のため不明瞭である。８は底部で、底径は6.0㎝を測る。内外面の調整は摩滅のため不明瞭である。時期については、古墳時代初頭（庄内式併行期中段階）のものと考えられる。９～12は溝23から出土した土師器である。９は甕であり、口径10.5㎝を測るもので、外面の調整にはタタキが施されており、内面の調整には指オサエがみとめられる。10は口縁端部を丸く肥厚させる布留式甕であり、口径は13.8㎝を測る。内外面の調整は摩滅のため不明瞭である。11・12は、法量がほぼ同じ小型の壺であり、11は頸部径3.2㎝、12は底径2.6㎝を測る。外面の調整はともにタテ方向のヘラミガキが施されるもので、11は頸部付近に、また12は底部周辺に指オサエがみとめられる。内面の調整にはともにナデが施されており、11では絞り目痕がみられ、12では粘土紐の積み上げ痕が残る。これらの時期は、古墳時代前期（布留式併行期）のもと考えられる。

［その他の遺物］

13は溝25から出土した砂岩製の砥石である。法量は、残存長13.8㎝、幅4.8～7.2㎝を測り、重量は700gである。石材の断面形は、研磨されたことによって台形状を呈し、さらに各研磨面は緩やかに彎曲するものである。使用痕については、各研磨面に筋状の擦痕がみとめられる他、石材の稜線部分及び先端部には敲打痕がみられることから、砥石として使用した後叩石に転用されたものと考えられる。



遺物実測図３

まとめ

今回の調査では、竪穴住居をはじめとする弥生時代後期から古墳時代前期にかけての遺構を多数確認した。またこの他、鎌倉時代のものと考えられるピットも少数ではあるものの確認することができた。これらの遺構群は、第１・２次調査によって確認された弥生時代後期から古墳時代前期にかけての集落及び、鎌倉時代の集落がさらに西及び北側に広がることを示すものである。また今回の調査では明確な奈良時代の遺構については確認できなかったものの、出土遺物として当該期の遺物が出土していることから、奈良時代の集落についても今回の調査地周辺に分布しているものと考えられる。

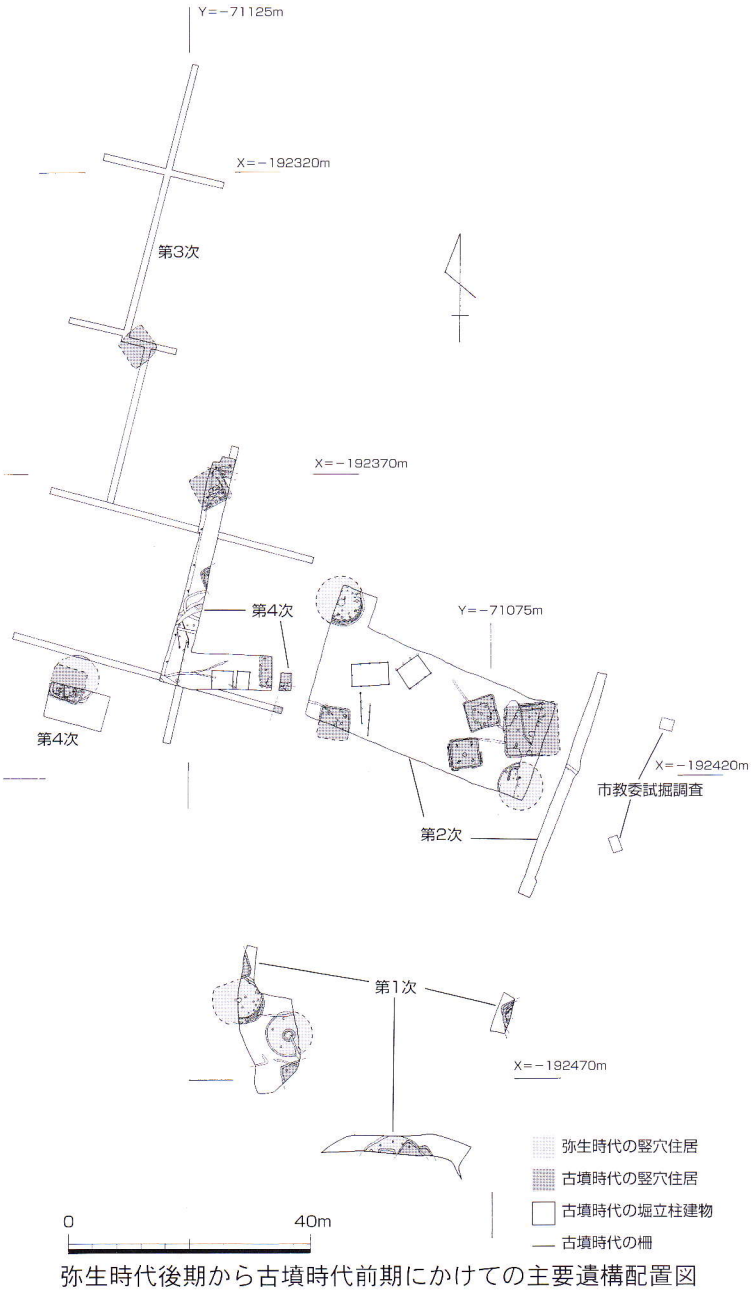
ここでは、主に今回の調査によって確認した弥生時代後期から古墳時代前期にかけての遺構の時期別変遷について、第２次調査において検出した竪穴住居の出土遺物やその重複関係及び方向性を参考として整理しておきたい。まず弥生時代後期のものとしては、円形の竪穴住居である竪穴住居５及び溝25があり、弥生時代後期末から古墳時代初頭のものとして竪穴住居の壁溝と考えられる溝１及び土坑13がある。古墳時代初頭のものとしては、庄内式併行期古段階に位置づけられる方形の竪穴住居である竪穴住居８及び土坑２があり、同じく中段階のものとして方形の竪穴住居である竪穴住居７や溝５、また新段階のものとして方形の竪穴住居である竪穴住居１・２及び溝２がある。

さらに古墳時代前期のものとしては、布留式併行期の竪穴住居と考えられる土坑１及び　溝23、土坑11があり、その他、古墳時代の範疇に位置づけられるものとしては掘立柱建物１・２、柵１がある。

このように今回の調査では、弥生時代後期から古墳時代前期にかけての遺構については大きく６時期の遺構が同一面上において検出される状況である。

次にこれらの遺構のうち、第２次調査において確認された竪穴住居の変遷と整合性をもつ時期について整理しておきたい。第２次調査において確認された竪穴住居の変遷は、第Ⅰ期を弥生時代後期、第Ⅱ期を庄内式併行期古段階、第Ⅲ期を庄内式併行期中段階、第Ⅳ期を庄内式併行期新段階とするものである。そこでこれらの各期を今回の調査成果に当てはめると、第Ⅰ期は竪穴住居５の時期、第Ⅱ期は竪穴住居８の時期、第Ⅲ期は竪穴住居７の時期、第Ⅳ期は竪穴住居１・２の時期となる。よって、今回の調査では、弥生時代後期末から古墳時代初頭に位置づけられる溝１や土坑13の時期及び、古墳時代前期に位置づけられる土坑１や　溝23及び土坑11などの時期の遺構が確認されたということになろう。このうち前者の時期の遺構としては、第１次調査において隅丸方形の平面プランをもつ竪穴住居が１棟検出されており、当該期の遺構が丘陵全体に分布することを示すものである。

以上、第１～４次にかけての調査結果から、府中Ⅳ遺跡が立地する丘陵上部から東西の斜面地は、弥生時代後期から古墳時代前期にかけて盛行する集落が広範囲に展開していたものと考えられる。また、検出された竪穴住居は、その壁溝が数条重複して掘削され、同じ場所に長期間居住していたことを示すものが数多くみられることから、この丘陵上は人々が生活を営むうえで適していたものと考えられる。今回の調査は、調査対象地が丘陵頂部から西側斜面地にかけてという位置関係であり、府中Ⅳ遺跡の範囲が傾斜地にまで広がるという貴重な情報を得ることができたものと考えられる。（藤藪勝則）



弥生時代後期から古墳時代前期にかけての主要遺構配置図

【参考文献】
『府中Ⅳ遺跡第２次発掘調査概報』
財団法人和歌山市文化体育振興事業団
1996年

Ⅳ．普及啓発活動

1．書籍刊行

埋蔵文化財の発掘調査報告書を刊行し、関係機関等へ配布した。

『和歌山市埋蔵文化財発掘調査年報　－平成17年度（2005年度）－』（平成20年３月）

発掘調査報告書の編集を行った。

『和歌山市内遺跡発掘調査概報　－平成18年度－』（平成20年３月）和歌山市教育委員会発行

2．速報展等の開催

和歌山市立博物館と共催で速報展を実施した。

『第７回和歌山市埋蔵文化財速報展　「土のなかからの贈り物」』

平成19年４月21日～６月３日　和歌山市立博物館　特別展示室

速報展に伴い調査報告会を行った。

『ミュージアムトーク「スライドで見る和歌山市最新発掘情報」』

平成19年５月19日　和歌山市立博物館　講義室

3．現地説明会等の開催

和歌山市教育委員会と共催で現地説明会を実施した。

雑賀崎台場跡現地説明会（トンガの鼻自然クラブ対象）

平成19年11月９日　参加者約30名

和歌山城管理事務所・和歌山市教育委員会と共催で現地説明会を実施した。

史跡和歌山城第30次発掘調査現地説明会

平成20年２月16日　参加者約100名

4．講師派遣等

財団法人和歌山県文化財センター主催の報告会に講師を派遣した。

『地宝のひびき　－第２回和歌山県内文化財調査報告会－』

平成19年７月17日　岩出市民俗資料館

派遣職員　井馬好英　「川辺遺跡の発掘調査」

財団法人和歌山県文化財センター・和歌山市立博物館共催のシンポジウムに講師を派遣した。

共催シンポジウム『和歌山城再発見』

平成19年11月３日　和歌山市立博物館　講義室

派遣職員　北野隆亮　「史跡和歌山城の発掘調査」

平成22年３月15日

和歌山市埋蔵文化財発掘調査年報

－平成19年度（2007年度）－

編集・発行　財団法人 和歌山市都市整備公社

和歌山市西汀丁36番地

印　　刷　株式会社ウイング

©財団法人 和歌山市都市整備公社